「懐かしさ」についての覚え書き

アサダ ワタル
文化活動家・近畿大学文芸学部教員

〈哲学×デザイン〉プロジェクトのイベントに登壇した際に話したテーマは、「音楽と想起のコミュニティ」だった。僕は「想起」という現象について語るうえで、「懐かしさ」とどう付き合うか、いつも考えてきた。「懐かしい！」という感情は、世間一般では良いこととされている。実際に僕も、音楽で人々をその感情につなげ、場をつくることをしてきた。でも、「懐かしい！」が、時として分断を生むこともあるのではないか。

こんなことを思い出す。

90年代始め、毎週火曜日に、大橋巨泉が司会を務める『ギミア・ぶれいく』(TBS)という番組があった。中でも記憶に残っているのが番組内で「徳川埋蔵金発掘プロジェクト」というコーナーだ。江戸末期、討幕軍に江戸城を明け渡した幕府が、いつか再興するために群馬県赤城山山中に隠したとされる徳川埋蔵金。その存在を確信し、明治16年から120年あまり、祖父子三代にわたって掘り続けている水野家の取り組みに光をあて、糸井重里を筆頭としたプロジェクトチームを結成。重機を大量に導入し、莫大な予算をかけて穴を掘り続けては、「あるとしか言えない」とまで言い切った糸井氏。当時通っていた大阪の小学校では「昨日はあそこまで掘れたね」とか「いやいや、結局ないんとちゃう!?」といった会話がなされ、全国的なブームとなった。でも、埋蔵金はとうとう見つからなかった。プロジェクトチームも解散。誰もそのことを口にすることがなくなり、仮に会話にあがっても「(笑)」にしかならず、埋蔵金を代々掘り続けているあの家族の存在も、世の中から忘れられていった。

それからだいぶ経った2006年の秋、当時お世話になっていた大阪の映画館で見かけた上映スケジュール。そこには、『あたえられるか否か〜徳川埋蔵金120年目の挑戦』と書かれていた。この映画は、水野家の取り組み、とりわけ三代目、水野智之さんを3年に渡り記録したドキュメンタリーだ。この映画のことを知っ

た多くの人は「懐かしい！この人たち、まだ掘り続けているの…!?」という反応をしただろう。僕だってその一人だ。芸能人でも、スポーツでもなんでもいいけど、こういう感覚を持ったことはないだろうか。

「うわ、まだ、やってんねんや」
「めっちゃ懐かしい。まだ続いてるの!?」

僕はその反応を自ら体感しつつ、同時にそんな反応を抱いた自分に対して違和感を覚えた。「その“懐かしさ”は、都合の良いアウトサイダーの主観にしかすぎないのでは？」と。

拝んで神のご信託でボンと出るようだったら、
水野は１２０年何をやってきたのか。
だからこそ、掘れる。
そういう信念があるからこそ。
そういう星の下に俺が生まれちゃって、
やらなきゃならないという、
ひとつの使命感が生まれちゃった。
だからやる。

（水野智之さんの言葉。映画『あたえられるか否か～徳川埋蔵金120年目の挑戦』より）

そうだ。さらに思い出す。

プロ野球をよく見ていた小学生時代。僕は西武ライオンズが好きで、当時は近鉄バッファローとか南海ホークスとか、阪急ブレーブスなどがチーム名だったが、気付けばソフトバンクとか、楽天とかDeNAなどと名前がどんどん変わってゆき、現在まったくプロ野球をみない僕にとっては、それを「終わったもの」として見ている。でも当たり前だが、多くの人たちにとってプロ野球はまったく「終わって」なんかいない。僕の中でのプロ野球に対する関心という意味での「メジャーな時代」「輝かしい時代」が終わっただけであって、現実はただただ続いていく。音楽でも「あのバンド、まだ活動してるんか!?」という反応も、当人やそのファンにとってみたら「当たり前やん。あんたが勝手に関心失っただけでしょ」という気持ちだろう。この無関心の主観を裏返して考えれば、そこには「自分が関心を持っていた（見ていた）時代が全盛期だった」という謎の思い込

みが存在する。

その思い込みを助長する存在として、「メディア」があるのではないか。メディアは、相手の関心のきっかけをつくると同時に、その関心をメディアがその時取り上げたい流行とがっぷり四つ連動させてしまう。つまり、「そこに現れているから関心を持ち、現れなくなったから関心を持たない」という構造を生み出す。ごくごく当たり前のことを言っているのは承知だが、これは恐い。つまり出来事の「現れ」を発見するそのバリエーションがあまりにも狭すぎるということだ。僕らは無関心の主観を助長させる前に、関心のきっかけとなる「現れ」の発見方法をこそ、主観で編み出さないといけない。まず具体的には、世の中にわかりやすく「現れている」という現象に対して、疑いの目を投げかけること。実は「なだらかに続いている」ということを見落さぬように。そう、メディアが一部を切り取らなくても「続いて」いくのだ。

改めて、僕は「音楽と想起のコミュニティ」というテーマにおいて、このことを強く意識している。音楽などの表現を「現れ」の発見方法とすること。「懐かしい！」で過去と現在を分断するのではなく、むしろ「地続き」であることこそを確認すること。その構えがあってこそ、「懐かしい！」の先に自己や他者との新たな「出会い直し」があるのではないか。

誰かにとっての「懐かしい！」は、別の誰かにとってはリアルタイムであるということ。対象への関心をずっと持ち続けている人たちにとってみれば、その対象の行く末と彼ら彼女らの人生は心地よく連動していることを踏まえること。僕はこれからも、「懐かしさ」の取り扱いに関心を向け続けるだろう。

ヴァナキュラーなグローバリゼーション、あるいはグローバルなヴァナキュラリズム

阿部 健一
総合地球環境学研究所・教授

言葉を探している。

海外で活動することが多かったが、次第に日本国内のあちこちに行く機会が増えた。そして気が付いた。地方で大きな変化が起こっている。大きいというのは言い過ぎかもしれない。一つ一つの変化は実はまだ小さく、目立たない。しかも個別分散、あちこちで独立して起こっていて一見つながりがない。ただこうした変化には通底しているものがあると思う。それはやがて大きな動きになるのでないかと思う。探しているのは、今起こっているこの変化を的確に言い表せる言葉だ。

＊

最初に変化に気づいたのは、農業の現場だ。

10年ほど前までは農業は魅力あるものではなかった。5K産業と言われたこともあった。後継者もいない。年配の農業者は「息子には農業を継がせたくないし、娘には農家に嫁いでほしくない」と言っていた。

しかし農業に魅力を感じる若い人が多くなっている。宮崎県・高千穂町のコナミさんもその一人。ラナンキュラスという花の栽培を一人で行っている。農閑期はビニールハウスでコンサートをしたりして楽しんでいる。

一人でというのは正確ではない。困ったことがあれば近所の農家のおじさんたちが助けてくれる。ビニールハウスの設営のときには、手伝いに来たおじさんたちの軽トラックが列をなした。栽培方法も、みんなが教えてくれる。コナミさんは飲み込みがよく品評会ですぐに賞を取った。おじさんたちは「わしらが何年もかかったことを……」と嬉しそうに話してくれた。

隣の五ヶ瀬町のスガワラさんは40代の若い林業経営者。従業員も若い人ばかりである。なにせ山で働くほど楽しいことはないらしい。害獣のイノシシやシカはごちそうである。仕事が終わった後はみんなで美味しくいただく。「毎晩焚火を囲んでキャンプファイアーですよ」。しんどい仕事に違いないが、自然に近

いところで仕事ができる喜びの方が大きい。アイヌの友人で「芸術家」であるユウキコウジが、焚火にあたって語らいあうことが芸術で、そのような作品を作りたい、と言っていたのを思い出した。

若い人が農業に参入すると、年配者が元気になる。「林業はもうだめだ」と言っていた人が、焼酎を酌み交わしているうちに、山の魅力を語り始める。雨あがりの緑の美しさ。暑い夏の午後、仕事の合間に渓流でイワナを捕る楽しさ。しんどいけど楽しかった。後悔することはない。杯を重ね、日付が変わるころには「山で仕事ができてよかった」としみじみと言う。

農業や林業が生き生きとし始めた。まず若い人から、そして彼らから気づかされて年配の人も、地元の大切なものに再び目を向け始めた。「地方」が生き生きし始めたようだ。自然に近いところで、地に足をつけた生き方をすることが見直されている。

＊

それで思い出したことがある。もう十数年も前だが、金沢で国連の広報担当の方を招いて講演会があった。目的はグローバル人材を育てるということ。学生が海外に出て行かず、内向なのが問題とされていた頃だ。国連の活動の紹介をしながら、若い時に国連の総会議場の演壇に立ち、いずれ世界に向けて発信したいと思ったご自身の経験を話された。講演もその後の質疑応答もよかった。学生からは、国連が長年活動していながら、平和維持が実現できないのはなぜか、と手厳しい質問も出た。

印象に残ったのは最後に質問した学生だった。卒業後、海外ではなく故郷の能登半島の先端の町の中学校に社会科の教員として赴任するという。小さな田舎の中学校で、世界の中心からは遠く離れ、海外と触れ合う機会の少ない生徒だからこそ、世界のことを生き生きと実感をもって教えたい。どうしたらいいでしょうか、という質問だった。

海外の情報は、当時もそして今はさらに、容易に入手できる。国際社会の動きは毎日のようにニュースとして目に入り耳にする。なかには一部分だけを取り上げたものも多い。そうした玉石混交の情報の中から、本質をつかみ、知識とし、さらに未来を考える知恵としてしてゆく。

どうしたらいいのか。

彼と話をしたくて、講演会の終了後、姿を探したが、見失ってしまった。

今なら彼に自信をもって伝えることができる。「地方だからこそ、世界を本当に知ることができる。そしてそれをより豊かに生きるための知恵にすることができる」。

＊

「オセロゲームです。端にあるから強いんです。」。五ヶ瀬中等教育学校のカミミズ先生が言っていた。宮崎県西北の山の中の学校。公立で全国初の中高一貫の学校である。

過疎化が問題となっていた昭和６１年に、宮崎県はフォレストピア構想を立てた。「21世紀には森林が人間の生活には欠かすことのできないような社会、即ち『森林化社会』が到来する」と信じてである。「森林・林業を切り口とした新しい山村社会の建設を試みて山村地域の活性化を図る」ことが目的。卓見だったのは、まず学校を立てたことだ。短期的ではなく、人つくりという長期的な視野に立っていた。それが五ヶ瀬中等教育高校である。

まわりに「何もない」環境のなか、一学年４０名の生徒が、全員寮生活を送っている。県内全域から生徒が集まってくる人気の学校。IT技術を活用して世界とつながっている。生徒と話して気が付くのがみんなきちっとした目的をもって勉強していることだ。何になりたいか、ではなくて何をやりたいか。高校生の時に、何をやりたいかなど考えたこともなく、とりあえずどこか大学に入っておこうと思っていた自分自身を自省的に振り返る。

もう一つ高校を紹介しておこう。愛媛県の三崎高校である。

三崎高校は、九州に突き出た細長い半島の先端にある。さらに足を伸ばせば灯台がある。何を隠そう僕はその灯台の下で生まれた。父親が灯台守だったからだ。

何もないところだ。半農半漁。小さな浜に家が密集し、もろく痩せた斜面でみかんを栽培している。つねに強い風があたるところだ。いつのまにか半島の稜線に風力発電の風車が立ち並んだ。半島の根元には原子力発電所がある。住民は年を取り、空き家が目立つ。

そんな地域にある三崎高校が元気だ。地元の生徒は減少する一方だが、代わりに「地域みらい留学」という制度を活用して、東京や大阪を初め全国から生徒がやってきている。親元を離れた「留学生」は寮生活をおくる。

不思議だ。なんで何もないところにわざわざやってくるのか。

きれいな海があるから。ミカンが大好きだから。海とミカンしかないと思っていたが、彼らは海もミカンもあるでないかと思っている。そして「最先端の高校です」と胸を張っている。たしかに半島の最先端にある。

この五ヶ瀬中等教育高校と三崎高校が交流事業を始めた。修学旅行で五ヶ瀬中等教育高校の生徒が三崎高校を訪問することになった。山の中の学校と岬の先端の学校がつながる。オセロだ。ひっくり返って、一気に変わる。

＊

何もない地方なんてない。人がそこに根差して生活すれば、何かが創られる。何かを創ってゆくのが生活である。

若い哲学者のオオイケソウタロウさんに教えてもらったのだが、現象学者のブリュス・ベグーは「日常」と「平常」との違いを強調している。「平常」とは、秩序が規則やルーチンとして固定されている状態である。同じことの繰り返しだ。一方「日常」とは、何もないところから何らかの秩序が形成されてゆく創造的な過程だという。

都市の生活は、ともすればただ誰かが作った出来合いのシステムのなかで居心地の良い場所を見つけているだけで、「平常」を生きてしまいがちだ。選択肢が多いから、創造的だと誤解しがちで、生活そのものは実のところ単調である。一方、地方での生活は自分で居場所を創らなければならないから工夫が必要である。時間の流れも単調ではなく、毎日なにやかにやで忙しい。生活は自分で組み立てる、つまり「日常」を生きているからだ。

農業がそうなのだ。農業を繰り返しだと思っている人は多い。たしかに季節ごとに決まった仕事がある。しかしまったく同じことを繰り返しているわけではない。前作の結果を受けて、どうすればより良いものができるか、試行錯誤を続けるのが農業だ。「あと58回は挑戦できる」。三崎高校を卒業後、おじいちゃんのミカン園を継いだアベユキノリ君が言っていた。おじいちゃんがミカン作りを辞めた84歳までミカン作りをするとするとあと58年ある。その毎年工夫をこらす。農業は創造的で、けっして平常ではない。

＊

言葉探しは、アブダクションである。離散的な「事実」から共通するものを推論し、適切な言葉を与えたい。日本の地方でとりとめもなく見聞したことは、今起こっている何か大事な動きの予兆だと思う。

引っ張り出したのはヴァナキュラーという言葉だ。イヴァン・イリイチが昔『シャドウ・ワーク――生活のあり方を問う』(玉野井芳郎,・栗原彬訳　岩波書店1982)で使っていた。語源的には「根付いている」という意味である。生きている場。そこにあるさまざまなモノやことの中から自分の身の丈に合ったものを選び、それらをつなぎ、より合わせて、日常生活をおくることがヴァナキュラーだ。自律的主体が互酬的関係性を基にする生き方。交換価値や制度を通して、従属的に商品やサーヴィスを享受する人々は、「他律的主体」であり平常の生活を送っているにすぎない。

そのヴァナキュラーとグローバルを結び付けてみた。フランスのイエロージャケット運動など、世界的にヴァナキュラーな生き方が注目されている。今起こっている基層的な変化は日本だけではない。地域に根差すこと、地域の固有性の中に生きることが、逆説的に国際的であり、共通の価値をもち普遍的になるのでないか。友人の哲学者クラタタカシが「地域に徹底的こだわることで普遍的になる」と言っていたことが念頭にある。とりあえず探した言葉は「ヴァナキュラーなグローバリゼーション」である。

「哲学コレクティフ」について

阿部 ふく子
新潟大学人文学部准教授。専門は哲学。

哲学が扱うのは、普遍的な概念である。「人間」と言えば、目の前のこの人やこの自分といった特定の人間ではなく、人間一般を指す。こうした作法は、存在、わたし、他者、意識を考える場合も同じであり、言語、経験、思考、時間、空間、物、人生、死についても言える。哲学では、これらの概念の内実が、およそいつでもどこでも誰にでも当てはまる普遍的な次元にまで高められて考えられる。

しかし翻って、広大な砂漠が一粒一粒の砂の集積からなるように、普遍的な概念は微細な個の存在と無限の接点をもっている。個の次元は、普遍的な概念にとってどんな意味をもつだろうか。「人間とは何か」と考える主体は誰かと言えば、問いの答えになる対象化された人間一般ではなく、いまここにこうしているこのひとりの人間以外の何者でもない。この人が、この時、この場所で、この気持ちで、この言葉によって、人間とは何か、時間とは、空間とは、感情とは、言語とは、と普遍的な問いを立てる点に、わたしは哲学の密かなダイナミズムがあると思う。この動きをいろんな人びとと共有しつづけることができたら、普遍的な概念を臨む視界は一挙に彩り豊かなものへと開けるのではないか。

「哲学コレクティフ」は、そんな問いと関心から始まった（ゆるやかな）活動である。2018年から筆者の住む地元の新潟で不定期開催している。「哲学コレクティフ」という呼び名は、馴染みのバーのカウンターでふと思いついたものなのだが、その趣旨は端的に言うと、人びとが出会い、それぞれ固有の言葉・思考・行為を交わし、それによって〈概念〉が生まれ変化すること、またそうした事態が起きる場のことである。その場はかしこまった雰囲気ではなく、できれば、ちょっとした偶然や何気ない物事に囲まれた日常風景の延長であればよいと思っている。

「コレクティフ」という概念自体は、フランスの精神科医ジャン・ウリ（1914-2004年）の思想と活動から着想を得たもので、当時の筆者の問題関心にまさしく応えてくれる内容であったためモデルとした。ウリは、精神疾患をもつ人びとを「病院の病気」ごと治療するべく、1953年にラ・ボルド病院を創設し、「制度を使う精神療法」と言われる独自の精神医療を実践した。ラ・ボルドの日

常で大切にされるのは、人びとが集まり、動き回るという基本的なことであり、個々人がもつ無限のファクターを尊ぶことと、全体を形づくることとが有機的につながる場の構築である。それは日々のごく具体的なシーンの実践と切り離せない。患者とスタッフとが一緒になって食事の献立を考えて調理したり、また患者と会話をしながら彼／彼女がこの場所からどの場所へ移動したいと望んでいるのか、その動きを気に留めてみるといった、「ほんのちょっとした出来事」から織り成されるのが、ウリの言う「コレクティフ」である。

ウリの実践について詳しくは、『コレクティフ：サン・タンヌ病院におけるセミネール』（月曜社、2017年）、田村尚子『ソローニュの森』（医学書院、2012年）、映画『すべての些細な事柄』（監督：ニコラ・フェリベール、1997年）をご覧いただければと思う。

わたしはこの「コレクティフ」という言葉に込められた繊細な内容をヒントに、さまざまな人たちが集まって、個々人の経験、言葉、実感、考えを丁寧に受けとめつつ、みんなで一緒に哲学探究をしてみる場を「哲学コレクティフ」と称して実践することにした。そのさい、ウリにとってのラ・ボルドのような場になったのが、「つばめの学校」である。「つばめの学校」（2016年〜）は、新潟県燕市を拠点とし、学びの時間を共有する市民の小さなプロジェクトである。学びの関心は主に哲学に寄っている。運営メンバーの生業は、専業主婦、カフェ店主、鎚起銅器職人、デザイナー、バーテンダーとさまざまだ。筆者は自分も元々参加していたこの「つばめの学校」で、「哲学コレクティフ」をイベント形式で何度かおこなってきた。

「哲学コレクティフ」は略して「哲コレ」と呼ばれる。「哲コレ」が具体的にどんな形式でおこなわれるかと言えば、ごくシンプルである。まず「つばめの学校」のメンバーが日々の生活で気になっている概念をひとつ、気になる理由やその背景も含めて挙げ、テーマとして設定する。その上で、筆者が哲学の概念史のなかから関連テクストや論点を集めてきて紹介する。そしてこの既存の哲学の内容を足がかりとし、その場に集った各自が当該概念について自由に問いを立て、各自の知識や言葉を交え、対話によって概念を創造的に展開していく。これまで取り上げられた概念には、「美」「消費」「コレクティフ」「歓待」「差別」「会う」などがあった。「哲コレ」のコンセプトの詳細や具体的な実践の様子については、渡邉京一郎氏による「哲学コレクティフ@UTCP」（2019年12月21日開催）のブログ報告で丁寧にご紹介いただいているので、そちらを是非お読みいただきたい。

「哲コレ」は一見、筆者が上のように説明してしまうと、哲学研究者が主導するアウトリーチ活動のようなものに見えてしまうかもしれない。しかしここでの哲学は、完成品として届けられる情報ではなく、その場に投入されるやいな

や撹拌され姿を消す触媒のようなものである。この撹拌の動きにこそ「哲コレ」の核心がある。

コロナ禍のさなか、人と「会う」ということの意味や感覚は、個人個人の日常のレベルでつねに揺らぐ。「哲コレ」の場で「会う」をテーマとするとき、それらの雑感が言葉となって出会い、行き交う。そして一息つこうと座って読書をするように、マルティン・ブーバーの「対話」や、ハンナ・アレントの「活動」といった哲学的言説に触れてみる。哲学者の言葉と各自の思考が何らか交わる瞬間に、本からふと目を上げ、立ち上がってまたどこか次の場所に向かって歩きだす。たまたま近くにいる人たちと、さっきとはまた違った心持ちで語り合いながら、いつもよりちょっと遠くへ行ってみるのもいい。――こうした実にゆるやかだが着実な動きがすべて地続きで起こる場が、「哲コレ」だとわたしは今のところ思っている。

このようなコンセプトなので、「哲学コレクティフって、結局何なのですか？」という質問をやはりよくいただいてしまうのだが、筆者なりにそのつど暫定的にお答えしつつも、心の片隅では、「哲学って結局何なのだろう？」という問いと同じくらい応答をあたためたままでいてもよさそうなものだと思っている。現場で起こっていることが、定義づけを軽やかにすり抜けるからだ。できたとしてもそれはブレた写真のようにしかならない気がしてしまう。しかし、ラ・ボルドに逗留し、その動きに満ちた日常風景を淡く繊細にとらえつづけた写真家・田村尚子さんの作品を見ていると、「哲コレ」のかたちを描く言葉や思考を筆者も探してみたくなる。

今までのところ、「哲コレ」の表立った活動は、「つばめの学校」に限定しておこなってきた。またコロナ禍の現在は、オンライン実施に個人的に自信がないこともあり、公式にはほとんど開催していない。しかし、最近「哲コレ」を開催していないことで気づきはじめているのは、じつは周囲に名もなき哲学コレクティフがいくつも生じているということだ。ここでそれらを紹介することは特にしない。人びとがいて、思考と言葉と語りがあり、ちょっとしたことへの慈しみがある場所は、いつのまにか、たまたまそこにできているものなのかもしれない。

子どもたちとの声かけ活動から始める「共生」の実践

荒井　和樹
中京学院大学講師・全国こども福祉センター理事長

支援が集まる児童養護施設

児童養護施設では、消費しきれないほどの支援が集まります。大量のお菓子や文房具が届くたびに、どうやって子どもたちに配ろうかと施設職員は頭を悩ませていました。個人や企業からの招待行事では、プロ野球やサッカー観戦、コンサート、遊園地や外食などがあります。長期休暇は招待行事で予定がびっしりと詰まっているため、新規のお誘いをお断りするくらいです。

物品の寄付も悩みの種です。子どもたちの生活にかかわる費用は、公費で保障されているため、ランドセルや文房具などの学用品は新品を買うことができます。子どもたちは自分で好きなものを選んで購入しますが、支援を受けると自分で選べなくなることもあります。

寄付も招待行事も子どもたちが喜ぶものばかりではありません。いつも「誰が行くか」「誰が受け取るか」で揉めていて、押し付け合っていました。その理由は、物を受け取ったり、招待行事に参加したりすると、“お礼状”を書かなければならないからです。送られてくる支援に対して、「こんなのいらんわ！」「なんでお礼状を書かなきゃいけないの？」と怒りだす子どももいます。彼らの怒りの声は、直接支援者に届くことはありません。支援を受け取る立場は弱く、拒否する自由がないのです。

福祉が選ばれない現実

わたしは、施設職員として在職中、多くの子ども・若者と出会う機会がありました。SNSの利用、学校や繋華街、インカレサークルなどに出入りすれば、さまざまな人と交流できます。交流を続けていくなかで、公的福祉に抵抗を示す人々が多いことに気づきました。

たとえば、親からの暴力で家出や自殺を考えているという子ども若者に、児童相談所や法テラスの利用を勧めても、難色を示すことがほとんどです。それらの名前を出した途端に、態度が急変する方もいます。紹介した後、音信不通になるということも続きました。

これまで、支援が届かないとされる要因は、「援助機関側からの情報発信の不足」

や「申請手続きの難しさ」などが指摘されてきました。実際は、情報が届いているにもかかわらず、それを受け取らなかったり、選ばなかったりする人も大勢います。

一方、インターネットの掲示板やSNSでの投稿をみると、「寂しい」「誰か、かまって」と、援助を求める少女や繋がりを求める人々の姿を確認することができます。

繁華街に出向くと、援助交際や風俗店のスカウトやキャッチ、宗教やアンケートなど様々な勧誘行為がおこなわれていることに気づきます。彼らは、直接人々に声をかけ、対話と交流に時間をかけています。そこには、福祉や教育関係者の姿はありません。

福祉や教育分野も、援助機関や相談窓口の存在を知らせるためのチラシやポスターの作成、広告やキャンペーン活動は盛んに行っています。学校や施設などでは、複数の専門職が配置されるようになりました。ところが、学校や施設を利用できない場合は、その拠点の中で活動する専門職と出会うことができません。また、専門職も雇用主と雇用契約を結ぶため、所属先の指揮命令のもと、活動することが求められます。勝手な行動は許されません。

スカウトなどの勧誘行為を行う人たちは、個人で活動していることがほとんどです。彼らは、学校や施設以外の子ども・若者が集まる場所に出向き、声をかけ、信頼関係を築きます。立ち話や交流に時間をかけているのです。互いに目的を忘れ、長時間会話や交流を楽しむ人たちもいます。

学校は退学したり卒業したりすれば、行く機会がなくなります。福祉施設も身近とは言い難い存在です。利用しやすく、誰にでも開かれている場で活動したら、福祉が身近になると考え、繁華街や流行のSNS上で活動を始めます。声かけで出会ったAさんは、「公的な機関はハードルが高い。国や自治体は児童相談所などに相談窓口を設けているが、相談しようとは一度も思わなかった」と話します。Aさんのように、既存の福祉や支援に対し、疑問を感じている若者は少なくありません。

対話交流を目的に声をかける

声かけをしていると、無視されることもありますが、何らかの反応を示す人や、立ち話に発展することもよくあります。なかには、「面白いね、手伝うよ」と声をかけてくれる人もいました。10代の参加希望者が多く、受け入れに関しては悩みましたが、「同世代の子どもたちを救いたい」という声が多く、一緒に活動することにしました。

もし、「子どもだから」「弱者だから」という先入観で出会っていたら、彼らの「協力したい」という気持ちを置き去りにしてしたことでしょう。子どもたちと出会い、対話交流し、活動内容をバージョンアップしていけばよいと考えたのです。「児童福祉」や「若者支援」をゼロベースから自分たちで創る活動です。わたしは、仲間と活動できる環境を整えるため、全国こども福祉センターを設立します。

しかし、参加希望者の誰もが声かけを得意としている訳ではありません。人見知りや交流が苦手なメンバーのために、“着ぐるみ”や“ぬいぐるみ”の活用や、募金活動を行うようになりました。着ぐるみの着用は強制ではありませんが、メンバーから強い支持があり、10年以上、活用されています。

「着ぐるみのボランティアを見たことがある」「一度見たら忘れない」と通行人の印象に残り、覚えてもらえることがメリットです。ほかにも、リスクを回避すること（ナンパと間違われないため）、支援臭を抑えること、ブランドの活用、対話と交流の促進などの効用もあります。

全国こども福祉センターでは、支援を第一の目的としていません。メンバーは子ども・若者ですが、自立や就労を促すこともありません。NPOや援助機関の多くは、彼らを「自立させよう」とか「支援しよう」とか、目的（ゴール）ありきで関わろうとします。自立や支援を目的に出会ってしまうと、その先は専門家による管理や支配、操作や誘導です。

イギリスの訪問看護師によるアウトリーチは、ドライブと買い物、外食に多くの時間をさき、薬の時間管理については数分のみという報告があります。患者役割から解き放ち、生活者としての暮らしを守ることが目的にあるからです。アウトリーチは「協働」や「協奏」という意味があるのですが、日本では「訪問支援」と定義することが多く、家庭訪問の実践が中心となっています。過去に施設や病院に連れていくためのアウトリーチが行われ、訴訟に発展したケースすらあります。

全国こども福祉センターでは、出会った子どもに「解決すべき課題」や「支援」を押しつけることはありません。支援―被支援の関係性というよりは、協働的な関係を構築します。支えあい、貸し借りをできる関係です。支援よりも、対話や交流のほうが参加のハードルも低くなり、さまざまな人が参加できます。

活動を開始して10年が経過して、参加者が２万人を超えました。センターでは、障害を抱える人や非行経験のある人、児童養護施設出身者や無国籍の若者など、多様な背景を抱えるメンバーが活動に参加しています。彼らの多くが、社会から「要支援対象者」として扱われたことがありますが、センターでは、中心メンバーとして活躍しています。

「いないもの」として扱われること

声かけ活動は、繁華街やSNS上で行っています。どちらも、多くの人々が集う場です。タバコを吸う少年や座り込みスマホをいじっている少女、ホームレスの姿もあります。しかし、誰も声をかけることはありません。素通りする人ばかりです。選挙時は政治家も現れますが、わたしたちには目もくれず、演説が終われば立ち去ります。わたしたちは、目の前にいるのに、「いないもの」として扱われているという感覚をおぼえました。

「いないもの」として扱われる経験は、ほかにもあります。たとえば、多くの自治体は子どもの権利保障の取り組みとして、「子ども会議」を開催しています。参加できる子どもは抽選で一部の子どもだけです。選ばれなかった子どもたちの「参加の権利」や「意見表明権」は、どのように保障するのでしょうか。社会制度も、特定の人を対象とすればするほど、制度から排除される人が生まれてしまいます。

たとえば、子どもや若年女性を支援するために、それ以外の人たちを蔑ろにする取り組みもあります。わたしたちも活動当初は、活動を妨害したり、しつこく女性メンバーに絡んできたりする路上生活者や中高年男性の対応に苦慮していたことがありました。トラブルになることもあり、避けるメンバーも少なくありません。次第に、目も合わせなくなり、挨拶すらしないメンバーも増えていきました。わたしたちも路上生活者や中高年男性の人たちを無視して、「いないもの」として扱っていたのです。

声かけと交流から始める共生の実践

繁華街で、子どもたちが声かけや交流を行うことは、著名人や一部の専門家などから批判もあります。危ないから、「子どもにやらせるべきではない」という考えもあるでしょう。

しかし、声かけを通じて、障害を抱える人や家出をしている若者、外国人、ホームレスの人々と出会うことができます。安易に「子どもだから」と、考える機会や交流の機会を奪っていたら、互いの理解は深まるどころか分断を招くだけです。全国こども福祉センターが学校や施設ではなく、駅前や路上など公開の場で活動している理由は、そこにあります。

「子ども」と「大人」、「支援者」と「被支援者」と線を引くことで、役割や社会的な地位を固定化させ、交流を困難にしているからです。子どもを隔離保護し、一部の大人だけで物事を決めてしまっていることも少なくありません。それは、子どもを社会の一員として認めず、排除しているようにも思えます。わたしは、子どもたちは単なる守られる存在として扱われることに疑問を感じ、ともに交流する活動を続けてきました。交流は、他者を「いないもの」として蔑ろにせず、たがいの存在と違いを認める営みです。得意と不得意を持ち寄れば、支えあうことや働くこともできます。

声をかけ、出会うこと。出会った人々の存在と違いを認め、かかわり続けること。たがいに貸し借りができる関係を築くこと。それが、子どもたちと行う共生の実践なのです。

哲学×出会い

石原 鉄兵
株式会社アロハー　代表取締役

はじめまして、株式会社マハロー石原鉄兵と申します。この度は、＜哲学×デザイン＞プロジェクトのブックレットに寄稿の機会を賜り光栄です。梶谷先生とは哲学×婚活というテーマで2017年には婚活イベントを、2019年には哲学対話×婚活イベントでご一緒させていただきました。梶谷先生に初めてお目にかかるまでの私は恥ずかしながら哲学に対する知識はほぼありませんでしたが、先生から色々とお話を伺うにつれ、出会いや婚活のきっかけに哲学との相性が良いのでは？と強く感じるようになりました。

私の前職は結婚式場、その後、独立し出会いの場をプロデュースするという事業をスタートして15年が経ちました。どうすれば良い出会いの場が作れるのか？参加者が自然に楽しく出会える場をプロデュースできるか？を今でも考え続けています。哲学の定義は広いと思いますが、中でも哲学対話について伺い、自分でも初めて体験させていただいた際に衝撃を受けたことを覚えています。初めて会う方同士が、男女や年齢や身分にかかわらず自然とコミュニケーションを取りあう姿は、これこそ出会いの目指す姿ではないかと一人で感動していました。

今、世の中にある恋活、婚活サービスは、容姿や年齢、年収でまずは相手を判断するという仕組みがほとんどです。もちろん恋活や婚活でのパートナー選びにおいて、容姿や年齢、年収などの条件面はとても大事です。ですが本来、条件面だけでなく人間性や生き様など本質まで含めた人柄が、それと同等かそれ以上に大切なはずです。しかしながら、人柄までたどり着く前に上辺だけで相手を選別してしまうのが、マッチングアプリや結婚相談所を含めた結婚情報サービス、いわゆる現在の恋活、婚活業界の大半です。

今のところ、始めから人柄を確かめ合えるのは、リアルな出会いだけではないかと私は感じています。リアルな出会いと言っても様々な形やサービスがあり

ますが、顔と顔を合わせて挨拶から始まる恋活や婚活パーティなどは、中でもお互いにフィーリングを感じやすいと思います。ですがここでもまた問題があり、世の中の婚活パーティには3分ごとの席替えを10人も20人も繰り返す、という回転寿司のようなスタイルも少なくありません。では何分あれば仲良くなれるのか？はまた別の問題ですが、名前、年齢、仕事などありきたりな条件だけを伝えあい、たった3分で自動的に席替えさせられるシステムがパートナーを探す手段として最適だとは思えません。

もし出会いの場自体が哲学対話なら、これらの問題を打破できるのではないか？初めてでも話しやすくなるアイスブレークタイム。そして皆で問いを考え、その問いについて考え、各々の考えを自由に発言する。最低限のルールはありますが、初対面で誰も傷つけることなく自由な発言ができる場などなかなかありません。

長らく婚活事業を続けてきましたが、初対面で上手くコミュニケーションを取れない方は沢山いらっしゃいます。先程は容姿や年齢、年収などの上辺について書きましたが、会話にも上辺があると思います。婚活だけでなくプライベートやビジネスの場でも、初対面では内容の無い上辺の会話だけで終えてしまうことも非常に多い。ですが哲学対話は正しいも誤りもなく、自分自身の考えを自由に伝えあいます。遠慮したりカッコつけたりする必要のない場で出てくる本音だからこそ、その方の考え方や人柄まで伝わる。これこそ人と人とが出会う上で大切なフィーリングを感じられる仕組みであり、本来の自然な出会いの姿ではないかなと感じています。

どの婚活パーティでも、お見合いのような初対面でも、最初に哲学対話をすれば良いのでは？と感じるほど、私は哲学対話のメリットを感じていました。ただ、哲学対話と聞いてすぐに理解できない方も多いことと、凄く堅苦しく感じてしまう方も多いのではないかな？と思う部分があるのも本音です。ですが何とかして哲学対話のメソッドを出会いに組み入れることができないか？という想いは常にありました。本当を言うと、今でも全国各地で朝昼問わず開催されているそれぞれの哲学対話の場から、お付き合いされるカップルや結婚される方々が今後続々と誕生するのではないか？とも期待しています。結婚や出会うために行う活動、いわゆる恋活や婚活というのは、目標がはっきりしすぎているがゆえに非常に難しい。今まで何十年も結婚できなかったのに、たった数か月婚活をしただけで結婚できるか？というと、そんなに簡単な話ではありません。ですが、恋活や婚活のためではなく哲学対話のために集まる方々は、パー

トナー探しが目的ではありません。だからこそ、良い出会いの場になる可能性が高いのでは？と感じます。ごく普通に哲学対話をするために集まった沢山の男女が、いつの間にか恋人になり、結婚につながる日がくることを私は密かに楽しみにしています。

実は現在、新しく株式会社アロハーを設立し、『マス活』というマッチングアプリのサービスを開発しています。こちらは哲学対話で自然と結ばれるカップルのような例とは違い、いわゆる恋活、婚活につながる話ではありますが、今までのマッチングアプリとは全く異なり「人柄でつながるマッチングアプリ」を目指しています。こちらのブックレットが完成する頃、ちょうどiOS版アプリを正式リリースしている予定ですが、従来のマッチングアプリや婚活サービスのように人を上辺などラベルで判断する世界からの脱却がテーマです。

新プロジェクトには梶谷先生にも多大なる応援をいただいており、正式に株式会社アロハーのエグゼクティブアドバイザーとして実際にサービスについてもアドバイスをいただいています。『マス活』の中ではオンラインで対話する部分が最大の特徴であり、哲学対話という名は出させていただいておりませんが、どこかで哲学対話のエッセンスを注入したいと考えながら進めてきました。

そんな簡単に取り入れられるとは考えていませんが、新プロジェクトはまだスタートしたばかり。今後、少しでも哲学対話の可能性をサービスに取り入れることができれば嬉しい限りです。これを読まれていらっしゃる方は、きっと哲学対話に深い思い入れのある方がほとんどかと思いますが、もし独身の皆様いらっしゃいましたら、『マス活』のスタートと同時に是非、使ってみてください！なんて宣伝したら梶谷先生に怒られちゃうと思いますが（笑）。いや、梶谷先生なら怒らないで笑い飛ばして下さると信じて！

電車に乗ることに理由はいらない

伊是名 夏子
コラムニスト

「障害のある人が不便な生活を送るのは仕方のないこと」「配慮が必要なら我慢をするべき」「旅行に行ったり、好きなものを食べることはわがままである」そういう差別的な考えがまだまだあると痛感したことが、2021年の4月ありました。車椅子ユーザーの私は、子ども二人と、ヘルパー、そして友だちの合計5人で、熱海旅行に行きました。ＪＲ小田原駅から乗車し、熱海駅で乗り換え、目的地の来宮駅まで行こうとした時、乗車拒否にあったのです。

乗りたい電車の30分前に小田原駅に着き、駅員さんに来宮駅に行きたいことを告げ、介助を頼みました。「発車の15分前に来てください」と言われたので、時間をつぶして改札に戻ると「来宮駅は階段しかないので、熱海駅までいいですか？」と言われました。私の目的地は来宮駅なので「いえ、来宮駅までお願いします」と返すと、駅員さんは困った顔をし「少々おまちください」と告げました。駅員さんが当たり前かのように案内を断ったので、車いすユーザーは階段しかない駅は使わないと、思い込んでいるかのようで私は不思議に思いました。数分して「熱海駅までしかご案内できませんがいいですか？」と同じように言われ、私も同じように「来宮駅までお願いします」と答えました。

次に二人目の駅員さんとも同じ会話を繰り返し、その間に乗りたい電車は発車してしまいました。

三人目の駅員さんが「来宮駅は階段しかないので、熱海までしかご案内できません」と同じように言いました。私が「バリアフリー法がありますよね？」と聞くと「3000人以上の駅が対象です」と言われました。「障害者差別解消法という法律があり、エレベーターがなかったりして、障害のある人が利用できないときは、他の方法を提供することが求められています。来宮駅に行ける方法は何かないですか？」と話をしましたが「現状ではできかねます」

「熱海駅では、一切対応していません」と言われました。

「まわりから駅員さんを集めて階段を持ち上げてもらえませんか」「駅員さんに一緒に行ってもらえませんか」と提案もしました。今まで階段しかない駅を利用する時は、何度も駅員さんに持ち上げてもらったことがあったので、無理強いしているわけではなく、対応の一つとしてお願いしました。しかし「熱海駅では一切そのような手配はできません。熱海駅からはご自分で考えてください」の一点張りでした。1時間以上交渉しましたが何も変わらず、時間も押していたので、不安を抱えたまま、とにかく熱海駅まで行くことにしました

熱海駅に着くと状況が一転し、駅員さんが4人待っていたのです。「私は駅長です。今回は特別ですが、タクシーを手配しました。私たち駅員が来宮駅まで一緒に行き、階段を持ち上げるのもできます」と提案されたので「公共交通機関を使いたいので、電車がいいです」と伝え、一緒に来宮駅まで行ってもらいました。駅員さんに車いすを持ってもらい、私はヘルパーさんにだっこをしてもらいました。翌日の帰りはどうしたらいいかと話をし、同じように対応をしてもらいました。

私は1時間以上、小田原駅で交渉を続けたので駅員の介助、合理的配慮が結果的に受けられましたが、それをこれからも毎回求められたくはありません。また「今回は特別に」と言われたことにも不安を感じました。一時間以上交渉しないと乗れないこと、もしくは私のように乗車を断られ、目的地で降りられるかわからないけど、強行で乗るしかないことはしたくないからです。障害者権利条約や障害者差別解消法もあり、障害があっても駅を使うことが保障されていて、電車に乗ることに理由も我慢もいらないと私は思います。それなので改善を求め、個人のブログ、連載中のコラム、そして知人の記者にお願いして、発信することにしました。まずはじめ自分のブログに「ＪＲで車椅子は乗車拒否をされました」と記録を発信したところ、一晩で炎上したのです。

「わがままだ」「車椅子なんだから事前に連絡しろ」「駅員がかわいそう」「駅員にこそ合理的配慮を」と言う批判がツイッターで始まりました。私を擁護してくれ、一緒に声を上げた人たちもいましたが、ネット上の匿名の人たちは擁護する人も執拗に攻撃しました。

障害のある人や、障害者の家族、介護者からは「私も車いすを使っています

が、毎回事前に連絡しています」「感謝の気持ちを忘れたことはありません」「伊是名さんのやり方は分断を生む」「介護職をしていますが、こんなわがままな利用者さんのせいでつらい思いばかりしている」と書かれました。

私を悪人に仕立てるための情報操作も始まり「わざと狙ってやったに違いない」「プロ障害者」と言われ、「クズ」「他人に寄生しないと生きられない自分を恥じろ」「障害者のために健常者は生きているわけではない」「伊是名を見たら階段からつきおとしたい」と差別的、攻撃的な書き込みが後を絶ちませんでした。そして「ヘルパー制度を不正利用している」「歩けるのに歩けないと嘘をついている」とデマが次々と書かれ、世界中に拡散されました。

私を取材した記事はYahooニュースに載り、一日で500件以上のコメントがつきました。「バリアフリーは進んでほしいけれど、やり方が間違っている」「障害者ではなく、伊是名が許せない」「障害者なんて生きていても意味がない」と私への批判だけでなく、人格否定やヘイトスピーチが並びました。YouTube動画も数多く作られ、「モンスタークレーマー伊是名夏子」「伊是名夏子の疑惑を暴く」をはじめ、20万回以上再生されているものもあります。

攻撃する人たちはインターネット上だけでなく、私の住んでいる役所に、私のヘルパー不正受給について問い合わせをしたり、警察に電話もします。私のパートナーの会社や、私の仕事のつながりがあるところにも電話をし、疑惑やクレームを入れます。自宅には差出人不明の手紙が来、不在着信もあり、さらには息子の学校にも電話が来ます。

心がズタズタになり、ネット上の集団リンチに遭っているかのようです。ネット被害の専門家は2, 3ヶ月経ったら落ち着くと言いましたが、状況はほとんど改善されません。8カ月たってもいまだにいろいろな書き込みがあります。警察も動いてくれず、解決方法のなさに、消えた方がいいのかな、と思う瞬間もあります。でも私が死なずにどうにかやってこられたのは、「障害者権利条約」や「障害者差別解消法」という法律があるからです。これをもとにすると、間違ったことはしていないと思えるからです。もし障害者差別解消法がなかったら、自分が間違っていたと思い込み、簡単に命を落としていたかもしれません。こんなにも法律や運動の大切さを感じたことはありません。いまは障害があっても、その本人ではなく、バリアを作っている社会側に問題があると考える「社会モデル」の考え方がベースです。しかし多くの人が障害があるのなら我慢することは仕方がない、障害者はまわりに感謝をしな

がら、頑張り続けることを求める「医療モデル」の考えから抜け出せていないのだと痛感します。

いじめの無法地帯になり、人の命を奪うこともあるネット被害を減らすため、法改正の必要性も感じています。「オンライン・セーフティー・フォー・シスターズ」を立ち上げ、オンラインの法律の改善に向け、活動することにしました。これから障害者が何か発信をすると、私のようにバッシングがより深刻になるかもしれません。また障害者という属性だけではなく、出自やジェンダー、肌の色、外国人へも複合差別で、ターゲットにされやすいのです。ネットを使いながらの発信、運動がこれからより求められてくると感じるので、安全に、安心して使えるネット環境を作っていきたいです。

障害のある人たちが繋がって、権利について考え、発信していくことも大切だと思っています。なぜなら障害があると、我慢を強いられるのは仕方ない、改善を求めるのはわがままだ、と感じてしまう障害当事者もたくさんいると気づいたからです。私も繋がれる仲間や、知識がなければ、自分を責め続けていたでしょう。車椅子ユーザー四人で「パンダデモ」というインターネットのラジオ配信を始めました。Facebook, Instagram, spotify, stand で「パンダデモ」と検索してみてください。障害があっても自由にのびのび生きたい、権利を大切にしながら、日ごろのもやもやを語っていきたいです。

「誰でも障害者になる可能性があるのだから、バリアフリーを進めていこう」という人もいますが、私はそれにも疑問を感じます。困っている人がいたら助けること、いろいろな人の生きやすさのために人権について考える時、損得や理由はいらないと感じるからです。また男性が女性になる可能性はとても低いですが、男女間の不平等さを解消するため、男性が女性について学ぶこと、ジェンダーについて考えることは当然のことです。人は一人一人違うのだから、多様性を受け入れることに理由はいらないのです。

そして最後に、構造を、社会を変えていくことの大切さを伝えたいです。困ったり、悩んだりして、壁にぶつかった時、ルールを守りながら、自分が変わることも大切ですが、同時にそのルールのせいで権利が守られないのなら、改善していくことも必要です。自分の困りごとの解決が、誰かの生きやすさにもつながると信じています。

＊今回、評論家の荻上チキさん主催の一般社団法人社会調査支援機構「チ

キラボ」が私のＳＮＳの実態調査を行い、60万件以上の書き込みを収集、分析しました。今後そのデータをもとに、障害者の生活を可視化し、当たり前に生きることを求めるプロジェクトを開始したいです。この調査に50万円かかっており、寄付を募っております。「ソーシャル・アクティビスト」のサイトからご協力いただけると幸いです。

ゆうちょ銀行・店番号098・普通3459052「パンダデモ」

コロナ禍の変化と対話 〜 哲学とデザインの関係性

稲原 美苗
神戸大学大学院人間発達環境学研究科　准教授

梶谷先生と私が共同で企画・運営した〈哲学×デザイン〉プロジェクト19「障壁のある人生をどのように生きるのか」が2020年1月12日に開催された。この日、早起きし、神戸から新大阪経由で午後に東京入りしていた。当たり前のように新幹線に乗車し、東海道を移動していたのだ。まさか、その1か月後に、新型コロナウィルスの影響で世界中が変わってしまうなんて、誰が予想できただろうか。このイベントに『ママは身長100cm』(2019年、ハフポストブックス)の著者、コラムニスト、骨形成不全症で2児の母親である伊是名夏子さん、当時私のゼミに所属し、シングルマザーとして修論を書いていた藤原雪さん、イギリス人として日本で暮らす脳性まひの哲学者、マイケル・ペキットさん(私の夫)をゲストスピーカーとしてお招きし、そして90名を超える参加者が東京大学駒場キャンパスに集まった。コロナ禍の今(2021年12月現在)では考えられないような密な空間で対話イベントを開催した。このイベント以降、多くのイベントや学会はオンラインになり、私も対面のものに参加していない。私の中で、この大きな変化を受け容れるまでに時間がかかってしまった。このエッセイでは、コロナ禍の変化と対話について掘り下げて、哲学とデザインの関係性を考えたい。

2020年2月中旬から、新型コロナウィルス感染症のパンデミックを収束させるという目的を達成するために、私たちの生活に様々な制約が出てきた。そのような環境で利用できる要素を組み合わせて、多くの要求を満たすために空間や行動などを変えなければならなかった。つまり、コロナ禍で人々はあらゆる場面で生活をデザインし直しているのかもしれない。私たちが生活しているこの世界は、大きく分けて2つのもので構成されている。一つは自然物で、もう一つは人工物ある。これら二つの違いは、人間の意図が影響しているかとどうか。人間は意図的に自然物を制御できない。意図とは、ある目的をもってそれを実現しようとする・させることであり、人工物は人間の意図があり、人為的に作られたものである。新型コロナウィルスが自然物なのかはよく分からないが、人間がそれを意図的に制御できないことを考えると、ウィルスは自然物だと捉え

ることもできるだろう。そして、ワクチンは、人間が新型コロナウィルス感染拡大防止のために意図的に作った人工物である。つまり、私たちは相反する要素を持ったものに囲まれた世界の中で生きていることになる。コロナ禍において、「自然VS人間」というような二項対立の構図が顕著になった。自然環境の中で脆弱な人間は、自分たちが生活できるように様々な道具を作り、生活空間や生き方をデザインしながら生き残ってきた。

繰り返しになるが、コロナ禍の日常生活では、それまでの「当たり前」が全く通用しなくなり、生活空間をデザインし直す必要が出てきた。デザインには、あらゆる関係性を捉え直し、生活環境を私たちに合わせて再構築し、新しい価値を生み出す力があるように思う。例えば、インターネットを利用したリモートワーク、遠隔授業、イベント、コミュニティ、人流や密を回避するような生活空間、新しい行動様式といったことは皆が実践している。しかし、私たちはそれらをデザインし直しているという意識なく、政府から出される緊急事態宣言の要請に従って、移動や行動を制限され、新しい生活様式を身につけているだけだと思っている。私たちは様々な事象を制限されているということに、疲れ果てたり、人との距離を取ることに、寂しさを感じたりしている。例えば、この〈哲学×デザイン〉プロジェクトを含むUTCPのイベント同様、私が主催している哲学カフェもオンラインでの開催を強いられた。最初は、「2次元（オンライン）で本当に対話ができるのだろうか？」という不安しかなく、全く期待していなかった。では、なぜ不安を感じ、期待できなかったのだろうか？と自問してみた。初めての試みで、前途多難であると思い込んでいた。何が問題だと感じているのかをリスト化して、その横に解決案を書き加えた。そして迎えた開催当日、画面が数回フリーズしたが、大きな問題もなく、無事に終えることができた。オンラインで哲学カフェを開催してみるとそのメリットに気づき始めたのだ。特に、移動する時間とコストを節約できるし、人々も自宅で気軽に参加できるようになった。オンライン哲学カフェの新しい習慣として、最初に呼ばれたい名前と住んでいる都道府県や国名を尋ねるようになり、対面の哲学カフェでは出逢わないような人々が集えることが新鮮に感じられた。つまり、コロナ禍で私たちの多くが経験した変化について、「なぜ」「どうして」を掘り下げて考えていくことの重要性に気づいた。つまり、私たちを思い込みから解放し、考え方を新しくデザインし直すということは、問い続ける視点を自らの生活に取り入れること、そして、主体的に生きることにつながるのではないだろうか。

一見、哲学とデザインとはつながらないように思える。しかし、哲学とデザインは非常に似ているし、つながっている。哲学は、あらゆる事物の前提（当たり

前）を疑い、その本質を考え直し、既存の枠組みを問い直す学問及び実践である。デザインは、私たちの無意識に動かしている身体を意識化し、世界と人間の関係性を観察し、それに合わせてモノづくりや場づくりする実践である。哲学とデザイン両者の共通点は何だろうか。哲学もデザインも創成する力がある。デザインは空間やモノを制作するが、哲学は思考力を高め、デザインに必要な意識化を促す。哲学もデザインも対話を通して世界と人間の関係性やあり様を具体的に認識する実践だと、私は考えている。コロナ禍において、自分自身の生活をデザインし直す必要が出てきて、「どのように生活を変えれば良いのか」という一つの正解を出そうとする人が増えてしまった。もちろん、未曽有のパンデミックによって、誰もが正しい答えをもっていない状況になり、自分の命を守るための選択を強いられている。しかし、「なぜ」という問いを考えることをしないまま、インターネット上の情報だけ読んで判断をしてしまうことに危機感を抱いた。なぜなら、インターネット上の情報は、検索者のキーワードによって得られる情報が偏ることが多いからである。

例えば、ワクチン接種に関して、当初私は慎重派だった。なんとなく異物を体内に入れるということに恐怖心があった。というか、そのような否定的な情報ばかりを選んで読むようになっていたから慎重派になったのだ。しかし、イギリス人である夫は、彼の親戚の多くが医療従事者ということもあり、ワクチン接種に対して肯定派だった。むしろ、彼は日本でのワクチン接種の進め方に批判的だった。「早く接種させてほしい」と毎日私に訴えかけてきた。イギリスの義父母も「（息子のために）ちゃんとワクチン接種の予約をしてほしい」と頻繁に電話をかけてきた。夫の家族には「打たない」という選択肢がなかった上に、「ワクチンを早く打ちなさい！」というパターナリズム的な発言が多かった。私は職域接種があり、夫より先に接種可能になり、打つかどうか迷っていた。職場の先生方にも相談し、色々な意見を聞いて回り、最終的に接種することを決めた。私にはある経験知（針・注射・先端恐怖症）があり、その経験が、素直に素朴に「接種する」という決断を邪魔していたのである。そのため、身近な人々と対話をし、「なぜ接種した方が良いのか？」という問いについて答えてもらった。「接種するべき」というパターナリズム的な意見ではなく、「ワクチンを接種していれば、感染しても軽症で済むから」「抗体ができたら、外に出られるから」など、語ってくれた。そして、「なぜあなたは接種したくないの？」という問いが私に投げかけられて、自分自身の偏りに気づけた。接種したいけど、針が怖かったのだ。小さなことだが、私一人でインターネットの情報を検索して判断していたら、接種できていなかったように思う。周囲の人々に問うてもらうことで、私自身と対話ができ、接種したくない理由が明確になった。その結果、接種会場で医

師に私のコンディションを伝えるという改善策も考えることができたのだ。

他の例も挙げてみたいと思う。オーストラリアの友人たちとオンラインで飲み会をする機会があった。少し哲学対話のようなことを試みた。例えば、「変化とは何？」というテーマで対話をした際、最初のうちは、「コロナのせいで外食の機会が少なくなり、自炊するようになった」「公共交通機関をあまり使わず、自家用車で移動することが多くなった」「海外旅行できなくなった。日本にも行けなくなって残念だ」「ヘルパーが来なくなり、外出できなくなった」というような具体的なケースについて語り合ったのだが、「それはなぜ？」と問いを出すと、「感染が怖いから」「変化しないと自分の命を守れないから」「周囲が変わったので、自分も変わらざるを得なくなったから」「不要不急の外出ができなくなり、映画鑑賞、旅行、外食などの不要不急の行動が文化そのものだったと気づいたから」「同調圧力を感じたから」といった深い話になった。この会で、私は、コロナ禍は国が違っても同じような変化を経験しているのだということが分かり、友人のこと、自分自身のこと、社会のことを違った視点で考えられたと実感した。普段のオンライン飲み会では会話をしているだけだったが、一つの問いを決め、皆で対話をするスタイルにすることによって、友人たちを取り巻く環境を立体的に捉えることができて、楽しかった。そこにいる全員が同じ立場で、誰も正解を知らない「問い」を考える探求のコミュニティができたようだった。「コロナ禍において私たちが変化するのは当たり前」だと思っていたけど、実際にみんなの生活がどのように変わったのかを言語化し、なぜその変化が必要なのかという問いについて丁寧に考えることで、癒しを覚えた。自分でコロナ禍について表現し、友人と語り合い、共に変化について考えた経験から、住んでいる国は違うが、コロナ禍を一緒に過ごしている感覚を覚えた。そして、この災禍がいずれ収束したら、対面で会おうと誓い合った。

今回のパンデミックが引き起こした問題は、その原因の複雑さからも分かるように容易には解決しない。インターネット上の至る所に情報は溢れ、誰でもいつでも情報にアクセスできるようになっているが、真実になかなかたどり着けない。私たちは与えられた情報や環境に多少の不満を抱えながら生きているが、何も考えないようにして日常を過ごしている。コロナ禍こそ、私たちの日常を問い直す力と、それを皆で一緒に考える「対話の場」が必要とされているのではないか。

哲学対話で結婚生活うまくいきまっせ！

井上 敬一
一般社団法人　恋愛・結婚アカデミー協会　代表理事

「哲学対話のルールを守れば婚活は上手くいく」
極論かと思う方もいると思いますが、僕の中で今やこの考えが確信に至ろうとしています。2019年12月「いかにして愛のために出会いの場をデザインするか」というイベントを梶谷さんに主催して頂き、友人の婚活業界に携わる石原鉄兵さんと共に講師として登壇、及び哲学対話に参加しました。実はこのイベントの前にも、梶谷さんには別の場で、哲学対話をして貰ってから婚活パーティーに臨むイベントをして頂きました。その時にも参加者の皆さんが、何故か仲良くなるし、普段の婚活パーティーよりも明らかに会話が盛り上がっていることを感じてはいました。当時はまだ、婚活と哲学対話の相性は良いのだな、くらいに思っていましたが、それが先述したイベントで更に理由が明確になり、そこから2年経った今では確信に至ったのです。

ところで、モテない人の二大特徴というものを発見しました。もう7年目に入りますが、恋愛や婚活に於ける悩みを解決するべく、毎月コミュニケーションセミナーを開催し、その後に参加者お一人につき一時間、個人面談をしてきた中で解ったことです。既にその人数は600人を超えました。セミナーに来る方は、やはり恋愛や婚活が上手くいかず訪れた方ですから、その方達の悩みや課題を抽出する際に理解できたものです。モテないと言うと語弊がありますが、要は人間関係が上手くいかない人の二大特徴と言ってもいいでしょう。結論から申し上げますと、

「他者に関心がない」
「自信がない」

この二つの特徴が挙げられます。この二大特徴は2019年のイベントに登壇した際にも、参加者の方に考えて貰いたいテーマでしたのでその場でお伝えしました。当たり前ですが、人は自分に興味関心を持ってくれる人に好感を抱きます。

「あなたになんて関心はないわ」という素振りや態度をされると、「こっちも願い下げです」となるのは必然です。また、この人は自分を受け容れてくれそうだという人にこそ、人は話し掛けたり、自分の本音を出せたりします。そういう意味でも自分に興味関心を持ってくれる人を、人は好きになるのは当たり前です。

こんなことを言うと、婚活中の女性が「私は彼に興味関心がありますよ」と反論する方もいらっしゃいます。ただ、よくよく話を聞いていると、それは彼の顔が自分のタイプだったり、或いはお金持ちだったという理由だったりすることも。これは深く考えると、彼への純粋な関心ではなく自分への関心なのです。自分が如何に良くなるかという自分への関心の方が強いということです。つまり、そういう人はどうしても相手への関心や思いやりには繋がらず、引いては人間関係が上手くいかないのです。更に自信がないというのも人間関係をこじらせる原因のうちの一つです。自信がないとどうしても暗くなりがちです。特別な理由がなければ、人は明るい人に寄りますので、自信がないと人間関係が上手くいきません。そして自信がなければ人とコミュニケーションを取ることも苦手になります。これも当然ですが人は会話をしてお互いを知り、会話をしてお互いを好きになります。しかし自信がないと話し掛けることを不安に思ったり、何か聞かれても自分のことをありのまま話すのが怖かったりもします。余談ですが自己開示は人に好かれるにはとても大切な手段です。自分のことをあまり話さず秘密主義の人は、相手に「自分のところに入ってくるな」「あなたを受け容れてはいません」というメッセージを発しているのと同じだからです。ですから自信がないことにより、自らのことを話さない、いえ、話せないというのは人間関係を良好にするのを妨げます。

また、自信がないことは別の角度での弊害もあります。相手がステキな人だと思えば思うほど「自分なんてこの人には不釣り合いだ」そんな気持ちが芽生え、自らパートナーシップを解除する方もいます。全員ではなく一部の方ですが、婚活では、相手がこちらを好んでくれていて、こちらも相手に好意を抱いているにも関わらず、自信がない為にその先に進まないという方もいらっしゃいます。これは相手が好きであればある程、素晴らしい人に思えますので、そんな人に自分は見劣りする、見合うわけがないという心理が働き、そもそも関係を構築できない、或いはお付き合いが始まっても常に自らの不安が付きまとい、最終的には関係を自分から断ち切る人もいるのです。自信がない状態と言うのは、例えるとアクセルとブレーキを同時に踏んでいるのと同じ現象です。モテない人の二大特徴と説明をさせて頂きましたが、ネガティブなことだけをお伝えしたいわけではありません。逆説的に言うと「他者に関心がある」「自信を持つ」

所謂モテない人の二大特徴をひっくり返すと、モテるようになるということも同時にお伝えしたかったのです。

「哲学対話のルール」
1.何を言ってもいい
2.人の言うことに対して否定的な態度を取らない
3.発言せず、ただ聞いているだけでもいい
4.お互いに問いかけるようにする
5.知識ではなく、自分の経験にそくして話す
6.話がまとまらなくてもいい
7.意見が変わってもいい
7.分からなくなってもいい

さて、だらだらとイベントの際にお伝えしたこと、今まで自分のやってきたことや発見をお伝えしましたが、本題の結論に戻ります。何故、哲学対話のルールを守れば婚活は上手くいくのか？それは、この哲学対話のルールを用いて会話すれば、自ずと他者に関心が持てるからであり、同時に自信を持って人とコミュニケーションを取ることができるからに他なりません。哲学対話に参加したことがない方の為に念のため哲学対話のルールを再度書きました。これを見れば解るように、基本的に参加者は自由気ままに話せます。また、人に否定されることもありませんし、話がまとまらなくても、意見が変わっても、分からなくてもいい、何だったら話さなくてもいいのです。また、知識でなく経験にそくして話すと誰もが公平に話せます。だから哲学対話の参加者は怖気付かずに、不安にならずに話すことができたり参加ができます。よって普段より自信を持って話せます。そして変な忖度をせず、良い話をしようとしなくていいので本音を話せます。本音を話すから面白いのです。面白いから興味も出てきます。何より、相手の話をちゃんと聞く姿勢が整います。

もっと言うと、疑問に思えば否定ではなく率直に問いかければいいだけです。その答えに関しても相手に否定的な態度を取られません。色んな考えや価値観が聞けてどんどん相手への関心も高まります。これは参加した人しか分からない感覚かもしれませんが、要するに、お互いの価値観や個人の思いを自由に言えて、否定もしませんが特に肯定もしなくてよい。ただ、尊重はしてくれているなという不思議な間柄になります。お互いの違いを楽しんでいるようにすら思えます。ここまで言うとご理解できたかと思いますが、哲学対話の参加者は、先述したモテない人の二大特徴が自然と打ち消され、他者に関心を自然と持ち始め、

なおかつ自信を持って会話が成立したりその場に参加することができるため、お互いにモテる人になるのだと僕自身は考えます。

コミュニケーションデザイナーと名乗り、婚活セミナーの中で、人に好かれるルールを伝え続けてきた立場で言えるのは、哲学対話のルールを守れば婚活は上手くいくというのは自明の理です。因みにですが、日常生活ではこの哲学対話のルールが敷かれていないため、相手を叩きのめす、論破する、正すということが繰り返され、相手の自信を奪います。聞く姿勢が整っていないため、相手の話をじっくり聞いていませんし、場合によっては自分の話をすることも多い。よって、相手への関心より自分への関心が強いことが多いのです。これではやはりモテないし、人間関係が上手くいくわけがないと思っています。これを書いている今時点では毎月、ご無理を言って梶谷さんにオンラインでの哲学対話を開催して貰い、ファシリテーションまでして頂いています。それはやはり、婚活、拡大解釈すると人間関係全般を良好にし、互いが好感を高めるのに、哲学対話が非常に有効だと肌で感じているからです。それにしても、哲学対話で思うのは、みんなモヤモヤするのが好きなんだなということ。互いに問い続け、更に迷い、悩み、延々と堂々巡りなんてこともよくあります。それでも皆さん毎回参加されます。僕みたいに答や結論を直ぐに欲しがる男にはなかなか理解できないところがまた、参加者への興味性が増して、自分自身のめり込んでたりするのです。

メタフィジカルデザインについて

今井 祐里
newQ / ニューQ編集部

もしも哲学者が一人で著作を書くように、人々が集まってみんなで一冊の哲学書を書いたら？その哲学書が、本ではなくてプロダクトやサービスの形をとって世の中に出ていったら？ということを、newQという会社で働きながら考えている。

私たちが日々作り出しているものやことはすべて何らかの思索の結果ではあるはずだけれど、だからと言って哲学の結果であるというわけではない。では、哲学的に考えることや哲学的に考えられたことの特徴とは何か。この問いに答えなければならない。

2020年の夏から冬にかけて、多摩美術大学の社会人プログラムであるTCL（Tama Art University Creative Leadership Program）でデザイン思考を学んだ。何ヶ月かかけてデザイン思考の実践を行う中で、どうしてもうまくいかないことがあった。何がうまくいかないのかを説明するのは難しいのだけれど、表面的に現れる問題としては「課題に対する解決のアイデアがいまいちつまらない」とか「いくらプロトタイプをつくってもどれもそれなりで決め手に欠ける」みたいな感じ。デザイン思考が「誰でもデザイナーのように考え、つくれるようになるための思考法」だとは言っても、そんなに簡単なわけないじゃないかというのはその通りだ。でも、プロのデザイナーと非デザイナーでは、アイデアやつくり出すものの必然性や強度という点で、明らかに違っている「何か」があるなと思った。それは視点なのか手段なのか何なのか。その「何か」が掴めるかもしれないと考えて、私は桑沢デザイン研究所の夜間部に通うことにした。

一番「ほー」という体感があったのはプロダクトデザインの授業で、石膏ボードを削って傘の持ち手をデザインしているとき。「ふむ」という感じがあった。物があるからこそ分かる納得とでも言うべきか、手の中の石膏ボードから「もう削るところないよ！」という声が聞こえる。プロからしたらまだまだ削るところも削りすぎなところも大いにある代物だったとは思うけれど、少なくとも私の手の範囲では「これが完成だ」という感覚があった。もしかして、プロのデザ

イナーが持っている「何か」とは、完全性の直観なのではないだろうか？

美術館で展示してある絵画を眺めながらいつも考えることが二つあって、一つは、何でこの題名にしたのかなということ。もう一つは何でこれで完成と思ったのかなということだ。画家はどうやって筆を置くんだろう？まだ余白はあるのに、なぜこれが完成だとわかったんだろう？そしてその作品に、どうしてこのように名付けたんだろう？...私には決してわからない論理で、しかしその絵には過不足がなく、そのようでなければならなかった必然性がある。

完全へ至ろうとする、制作とは異なるもう一つの営みに、哲学がある。完全性を真理と言い換えても怒られないと思うけれど、そこへ至ろうとする方法のああでもないこうでもないや、そもそも完全って何？どういうあり方をしてるの？というかあるの？完全性のわかり方とは？というさまざまな角度からの不断の問い直しが哲学の歴史そのものだ。

完全性を直観できないのなら、推論的（discursive）に迫っていくしかない。哲学の問いには、ひたすらに「本当にそうか？」「なぜそう言えるのか？」と、納得できるまで問い尽くそうというというコンセプトがあって、この繰り返しの果てで後ろを振り向いてみると、一つの世界が立ち上がっている。考えうる可能性をすべて網羅したという意味で完全なのではなく、問いによって立ち上がった世界が、私が削った傘の持ち手のように自らを充足させているという完全性。

哲学が得意としているこの推論的な完全性への接近を意識的に行い、非デザイナーや組織が行うデザイン思考のプロセスの中に位置付けて実践する試みに「メタフィジカルデザイン」と名付けてみる。足りない、違っていると感じた「何か」が埋まるかもしれない。

この試みは、「どのようにして、デザインすることが哲学することになるのか」と問うことでもある。デザインという行為を哲学するのでも、哲学する方法や思索のプロセスをデザインするのでもない。デザインにおいて哲学すること、あるいは哲学においてデザインすることを考えてみたいと思う。私が大学で研究していた中世末期の哲学者ニコラウス・クザーヌスは、木さじをつくるという職人的行為を通して真理を探究する無学者を「哲学者」として描いた。制作を通して世界と関係を結び、完全性に触れようとすること。しかもそれを協働で行うこと。そういった哲学探究のプロセスによって、この不確実な社会の中で実際に何かをつくり終えたあと、「見よ、これは極めて良かった」と安息するための価値の源泉ができれば良いと思う。

物語を作り、物語を生きること

岡田 基生
代官山 蔦屋書店 人文コンシェルジュ

十代の頃の私は、自分の人生に生き生きとしたリアリティを感じないというニヒリズム的な感覚に悩んでいました。哲学の道に足を踏み入れたのは、「本当の意味でリアルなものは何か」、「リアルに生きるにはどうすればよいか」という問いに答えるためでした。

哲学科に入学した私は、ダイナミズム溢れる仕方でリアリティを追い求めるプラトン哲学に魅せられ、そのままドイツの大学にも一年間留学します。しかし、西洋哲学やヨーロッパ文化に親しんだことで、かえって、西と東の文化の狭間で揉まれながら生成してきた近代日本哲学に改めて関心を寄せることになり、京都学派の祖である西田幾多郎(1870-1945)の研究を始めることになりました。それからは、後期西田哲学の「形」や「制作」の概念にフォーカスしながら、「世界はどのように形成されるのか」、「人間はどのように世界を作るのか」といった問題について日々、考えたのです。

しかし、「私たちが生きている現実がどのようなものか」を解明すると、次に「私たちはどのような世界を作ればよいのか」という新たな問いにぶつかります。西田は、それでは「何を、どのように作るのか」という、今日の言葉を借りれば「デザイン」が意味するところのフィールドにはほとんど踏み込むことがありませんでした。

この問いに取り組んだのは、西田の弟子で同じく京都学派の哲学者、三木清(1897-1945)です。三木は、私たちの生きている現実は、すべてフィクションだが、そのフィクションこそがリアルなのだと考えました(例えば、社会的な取り決めによって成り立つ貨幣が世の中を動かす力を持っているように)。このように考えるとき、私たちにとって大切なのは、「どのようなフィクションを作るのか」ということです。私たちは、どのくらい豊かなフィクションを作れるのか。つまり、彼は、生きているリアルがすべてフィクションだという理論から、「新たな文化を構想する」という壮大なプロジェクトへと歩み出したのです。

三木の構想について、少し詳しく見ていきましょう。とりわけ興味深いのは、表現の豊かさを追求する芸術的精神と、認識の正確さを追求する科学的精神を

クリエイティブな仕方で活かしながら、「生活の設計」を行うという考え方です。それは、仕事、家庭、交友、趣味など、自分が生きているさまざまな日常を総合的に捉えながら、それぞれの場面でどのような立ち振る舞いをするかをデザインしていくことを意味します。

生活をデザインするという行為は、一度きりで済むものではありません。一晩のうちに自分のライフスタイルを決めたり、キャリアプランを立てたりしておしまいというわけにはいかないのです。むしろ、毎日のさまざまな出来事、さまざまな物や他者との出会いの中で、自分のライフスタイルを常に更新していく必要があります。つまり、生活のデザインとは、考え出した計画の通りに生きることではなく、異質なものとの遭遇を大切にしながら、どのような選択が一番よいかを考え続けるプロセスそのものだと言えるでしょう。

私は大学入学当初からずっと研究者を目指していましたが、三木の哲学をじっくりと検討した結果、アカデミアの外に出る決意をしました。さまざまな道がある中で、哲学を学問的に研究するよりも、哲学を活かして、ダイレクトに人々の日々の暮らしを豊かにするようなコミュニケーションをすることに関心があると気づいたのです。そうして、修士論文を出した後、慌てて就職活動を始めることになりました。このプロセスも、まさに生活のデザインの一例でしょう。

現在の私は、ＩＴ企業を経て、「蔦屋書店」という商業施設で働いています。「書店」という名前がついていますが、書籍だけではなく日用品、衣料品、食料品、アート作品など、さまざまな品物を取り扱っています。これは、書籍と他の品物を組み合わせることで、総合的なライフスタイル提案を可能にするためです。

生活のデザインを行う主体は、あくまでひとりひとりの個人です。けれども、どんな人物になって、どんなふうに人生を過ごしたいか、たった一人で考えることは、簡単なことではありません。自分の生活をデザインするためには、さまざまな文化や思想に触れることが大切です。そのためのヒントや知識を吸収する手助けをするのが、自分の役割だと考えています。

蔦屋書店のコンシェルジュとしての主な仕事は、書籍同士を特定のコンテクストに即して並べたり、書籍と他の品物を組み合わせたフェアを開催したりすることです。そこで私は、訪れる人に三つのレベルで発見やインスピレーションが生まれるきっかけを提供することを心がけています。一つ目は、どんな服を着るか、どんな家具を部屋に置くかといった「趣味やスタイルのレベル」、二つ目はどんな基準で物を選ぶか、どんな人物になりたいかといった「価値観のレベル」、そして三つ目は、人生とは何か、この世界はどういうものか、人間と自然の関係をどう考えるかといった「人生観や世界観のレベル」です。この三つのレベルでの提案を行うとき、哲学研究を通して学んだ価値観、人生観、世界観な

どの知識、そして徹底的に物事の見方を問い直し、物事を総合的に捉えるという哲学的思考が重要な役割を果たしています。

また、私自身が仕事に哲学を活かすだけでなく、お客様にも哲学的に考える習慣をご提案したいと思っています。日々の生活をデザインするとき、用意された答えを生きるのではなく、自分自身の生き方をクリエイティブな仕方で作っていくには、世界との関わり方を反省するための哲学的思考が必要になります。

一般的に「哲学」というと、人生訓のように価値観や世界観に関わるものがイメージされやすいかもしれません。けれども、それだけでなく、どんなものを選ぶか、どのように振る舞うかといった「趣味やスタイル」の次元を考察の対象にすることで、哲学を私たちの生活の中に深く根付かせることができます。ひとつひとつの振る舞いと、価値観、さらに人生観や世界観が結びつくことで、奥行きのある豊かな生活が送れるようになるのではないでしょうか。例えば、人間を自然のサイクルの一部として捉える世界観を持ち、そのような考えが表現された詩集を読み、サステナブルな素材と製法で作られた服を着るというようなライフスタイルを構築するということです。

哲学を学ぼうと思い立ったときに抱いていた、「人生にリアリティが感じられない」というニヒリズムの感覚は、どこか毎日を他人事のように眺める消極的な態度に由来していたのかもしれません。自分の人生が、別の誰かによって書かれたフィクションのように見え、どこかに本当にリアルなものがないか、探しているかのようでした。しかし、自分に与えられたものも、これから自分が作り出すものもすべてがそもそもフィクションなのであり、それ以外にリアルなものはないのです。そのことを引き受けた上で、豊かで奥行きのある「物語」を作り、それを生きることが、私たちにできる文化的かつ創造的な生き方だと言えると思います。

そのようにして自らが構築した「物語」には、生き生きとしたリアリティが宿り始めます。それを構築し続けるクリエイティブな人生こそが、リアルに生きることだと言えるのではないでしょうか。

哲学と私たちが共にある日常を願って

尾崎 絢子
はなこ哲学カフェ・学校法人野澤学園哲学対話専任講師

哲学対話に出会い、実践を始めて8年になりました。この間に出会った様々な人たち、とりわけ子どもの支援者（子育て中のお母さんや保育士など）や幼児期の子どもたちとの哲学対話は私の実践の大きな軸となっています。2020年、突如訪れたパンデミックを経て、私たちを取り巻く世界や街は大きく色を変えました。そんな社会の大きな揺らぎの中、小さな子どもを抱えた母親たち、また幼い子どもたちや保護者を支えてきた保育士たちの葛藤や苦しみ、生きづらさ、そして何より彼女たちの問いに対する壮大なエネルギーをじわりじわりと感じながら、私自身も共に大切に、対話の場を抱えてきました。哲学プラクティスに関わる者として、女性として、母として、保育に関わる人として、日々感じている様々なことを、たどたどしくではありますが綴ってみたいと思います。

時々ふと思い出す「対話の場」があります。「対話の場」というよりも、対話の場の「ふとした瞬間」と言ったほうがしっくりくるかもしれません。地域の公民館が主催している子育て支援講座として、子育て中のお母さんたちのための哲学カフェが開催されたときのことです。参加者の方はみんな、乳幼児を抱えた子育て中のお母さんたち。講座中は別室で子どもを預かってくれる託児付きで開催され、お母さんたちはほんのひとときではありますが、子どもから離れ、自分だけの時間を持つことが出来ます。ほとんどの参加者の方が初対面かつ哲学カフェは初めて。少し緊張した雰囲気の中、話し合う問いが決まり、じわりじわりと対話が進んでいきました。日常の中にある何気ないこと。他者にとっては取るに足らない悩みかもしれない。でもその言葉１つ１つに、ずしんと重みがあり「なぜ？」「どうして？」と問うことにさえ少し躊躇するような、そんな感覚を身体が感じていました。そんな中、あるお母さんがこんなことを話してくれたのです。

「子どものやりたい気持ちを尊重してあげたい。でも、ファミレスでスプーンをテーブルにカンカン！ってし始めたら、なんというか…。やめなさいとは言うんだけど、どうしたらいいのかなって思いますよね…」

彼女が話し終わった瞬間、会場のどこからともなく「ああ…」という声がもれ、しばしの沈黙が私たちをまとっていました。彼女の言葉にならない問いたちは、霧のように私たちの視界に現れ、ほんの少しの湿り気を身体に伝えながら語りかけてくるようでした。霧で前が見えない。何かを、その答えを、つかみ取りたいのに届かない。そんなもどかしさと苦しさ。脆く、今にも崩れそうな不安定な足もと。誰も言葉を繋げることができない。逃げることもできず、そこに現れた問いを、ただ受け止めるしかない私たち。孤独。

でも１人じゃない。「私」の視界を遮る生ぬるい霧は、同時にここにいる「他者」の身体にもまとい、じわりじわりとその温度を伝えていきます。その、今にも消えそうな儚い繋がりこそが「私」から「私たち」へと作り変えてくれているようでもありました。

5歳児の子どもたちとの対話でも忘れられないシーンがあります。みんなで「音」について考えていたときのことです。私たちの周りにはどんな音があるかな？いい音？いやな音？どうしてそう思うの？そんなことを話しあっていました。そんな中、「心臓の音は普段は聞こえないけど、本当はある音だね」という話題になったときのことです。腕を組み、しばらくの間じーっと考えこんでいた女の子が、突然はっとした表情をし、興奮した様子で話し始めました。

「私、ずっと思ってたんだけどね、身体の中側に心臓を押してる虫がいて、その虫が心臓を動かしてるんじゃないかって」

目をキラキラさせながら話す彼女の姿と言葉たちは、共にいる他児たちの「へー」「わあー」「なるほどー」という言葉たちにまた、受け止められていきます。私は彼女の小さな身体から溢れ出すエネルギーや言葉たちに、ただただ圧倒され、そして何より感動し、胸がいっぱいになってしまいました。

「ずっと思ってたんだけどね…」

この言葉は、彼女がこの問いを日常の中でずっと、そして密かに抱えていたということを現しているのではないでしょうか。日々のふとした瞬間に「どうして心臓って動いてるんだろう？」という問いに出会い、もっと言えば「どうして人は生きているの？」というような根源的な問いにも触れながら、彼女は１人で黙々とこの問いを抱えていたのかもしれません。こんなに素敵な問いを持っていても、受け止めてもらえる場所がなかったり、「それはこうだよ」「こうするのがいいよ」と正解を与えられてしまったり、時にはさらりと流されてしまったり、そもそも誰にも気にとめられず冷たい地面にぼとっと落ちてしまったり…。残念ながら日常はそんなことにあふれています。本当なら大切にされなくてはならない「私の問い」が粗雑に扱われてしまう。そんなことを繰り返すうちに、人は問う力を奪われ、次第に忘れてしまうような気がしてなりません。

もしかしたらこのまま消えてしまっていたかもしれない彼女の問いが、言葉として場に現れ、そこにいる他児たちと共有できたこの体験を通して、この問いは彼女の身体に引き戻され、息を吹き返すことが出来たのではないでしょうか。そしてこの問いは再び、彼女の中で生き続けていくことでしょう。

私は社会の中で弱い立場に置かれている人々、とりわけケアに関わる人たちや子どもたちが、対話を通して、その人の「問い」を取り戻す瞬間に出会うことにたまらなく心が震えるのかもしれません。

問うこと、対話をすることは時に怖く、勇気のいることでもあります。しかし、自分の問いを取り戻し、不安定で不確実な世界を引き受け、そこに身を置き続けることが出来る人たちの圧倒的なエネルギーもまた、私は知っています。

日常生活の中で、私との関わりを営んでくれている様々な人たち。コロナ禍、多くの問いを抱え、考え続けながら看護の仕事に携わる彼女、自分の住む街や政治に真摯に向き合う彼女、一緒にウォーキングを楽しみながら自分の子どもの悩みを一生懸命語っている彼女もまた、共に哲学する仲間です。まさに哲学は私たちと共にあります。そして、長い時間を経てじわりじわりと「ここ」に根付き、気がついたら街の景色を変えていく。彼女たちと、そして子どもたちと共に哲学をしていると、そんな「希望」が１つ、そしてまた１つと私の手の中に生まれていくような気がします。

これからも哲学が私たちと共にありますように。また、１人でも多くの

大人や子どもが、自分の問いを取り戻すことが出来ますように。そんな願いを抱えながら私もまた、ゆっくり、ゆっくりと歩んでいけたらと思っています。

＜New Shape＞ーコンサートに穴を穿つー

小野 龍一
音楽家

突然だが、あなたは＜現代音楽＞という言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか。全く知らない人も当然いるだろうが、少し触れたことのある人ならばその言語化の難しさにモヤモヤするだろう。その音楽は広く定義すれば20世紀初頭から21世紀現在にかけてのクラシック音楽ー西洋音楽の創作の延長・発展形のジャンルだといえるが、一世紀の間にその創作理論は複雑に枝分かれし、極めて錯綜した状況を呈している。そのつかみどころのなさに、上記の問いを提示されて戸惑うのも無理はなく、専門とする筆者もやや回答に窮する。しかし、その混沌とした＜現代音楽＞の中にもひとつの「共通項」が存在している。それはコンサートという場である。

「あんなにざわめいていた人びとが今のこの静けさ――私にはそれが不思議な不思議なことに思えた。そして人びとは誰一人それを疑おうともせずひたむきに音楽を追っている。」（梶井基次郎『器楽的幻想』）

小説家の梶井基次郎は、フランスのピアニスト、ジル・マルシェックスの1925年の来日公演の際に自身がコンサートホールにて体験した幻想体験を巧みに文章化している。この文中で描写されているコンサートの光景は80年以上経った現在でもほとんど変わっていない。

このような演奏会のスタイルは、19世紀後半に完成したといわれている。作曲家のグスタフ・マーラー（1860-1911）が1897年にウィーン帝室歌劇場において、初の「客電消灯」を断行したエピソードが有名で、これにより、18世紀以前は一種の社交場としても機能していた劇場から暗い中でより音楽に集中して鑑賞するための場となった。また、19世紀のコンサートの目玉は新作初演が主だったが、同時期にプログラムの楽曲を歴史的に古いものから新しいものへと時代順にならべて演奏する「歴史コンサート」なる催しも盛んに行われており、ホールでの鑑賞において歴史的・美学的な知識を聴衆にも求めるようになる。以来、西洋音楽は知識と理解を前提としたその密閉空間を中心に変容してい

く。その果てにある＜現代音楽＞は、音楽内容こそ混沌としているが、その下にはコンサートという100年近く変わらない堅固な土台が存在している。

筆者はひとりの作家として＜現代音楽＞の制作をしていく中で、この音楽の土台である「コンサート」そのものに興味を持ち始めた。＜現代音楽＞の混沌とした状況から暗中模索で新しい創作を見出していくのではなく、その土台に直接メスを入れることに音楽と観客間のコミュニケーションの新たな可能性を予感したからだ。

「コンサート」という枠組み自体を制作していくこのシリーズに≪New Shape≫(＝新しい輪郭)というタイトルを付けて、2016年から本格的に実践を始めた。ひとつ具体的な例を取り上げる。

≪オルガンと話してみたら―新しい風を求めて―≫
(2018年3月30日 場所:東京藝術大学奏楽堂)

20世紀における日本のオルガンによる＜現代音楽＞を扱った演奏会。作品の主題は「これからの日本におけるオルガンという楽器を、演奏会を通して考察する」というもの。全体は2時間のコンサートで、大まかな内容は以下のようなものだ。

・曲間には、因襲的な拍手を挟まずにサウンドパフォーマンスおよび映像の挿入(サウンドはオルガン内部でサンプリングしたものを加工し素材として行われた)。会場備え付けのものを含め、10台以上のスピーカーを使用。映像は日本

におけるオルガンという楽器について、日本人のオルガニスト、作曲家数名にインタビューしたものを断片化し、無作為に羅列したものとなっている。

・後半から、サウンドパフォーマンスと並行してオルガン制作者によるパフォーマンス(舞台上手に配置された机にオルガン製作者が登場。その後の曲間で、金属パーツなどのオルガン部品の展示を舞台上に設営、パイプオルガン本体の解体が行われた)。

・コンサートのフィナーレでは舞台は徐々に暗転し、オルガン製作者によって解体され、作業灯によって内部がむき出しになったオルガンが暗闇に浮かび上がる。

この作品で要となるのは、演奏や音楽内容はもちろんだが、それらを取り巻く枠組み——曲間の拍手の廃止と10台以上のスピーカーによるサウンドパフォーマンス、無数の文章がランダムに配置された映像だ。曲間の拍手というのは非常に形式的なもので、それをなくすことで演奏会特有である曲間の緊張感の解消を図った。また、コンサートの中で観客は膨大な視聴覚情報の中から、各々が取捨選択しそれぞれのオルガン像を形作っていく。ラストに浮かび上がるむき出しのオルガンは、楽器の表面に施された西洋的な彫刻を解体することで、西洋的なイメージから解放された骨組みに観客が自身のオルガン像を投影し新たに肉付けしていくことを意図している。

文章では伝わりづらいかもしれないが、このように視聴覚の両方からコンサートホール／コンサートという枠組みを解体・再編成していくのが≪New

Shape≫というシリーズの基本的なコンセプトなっている。コンサートホールの外では、リスニングをめぐる環境は時とともに刻々と姿を変え、それとともに音楽自体も変容を重ねてきた。その中には当然音楽を受容するリスナーの存在もある。音楽史というのは同時に聴衆の歴史でもある。はじめに＜現代音楽＞が極めて錯綜しているということを書いたが、それは同時に大きなトピックの不在も意味している。トピックを欠いた対話は一見穏やかだがその実は空虚であり、本当の意味でのコミュニケーション—対話は困難だ。これは＜現代音楽＞とそのコンサートの観客に現在起こっていることであり、この問題を解決するには「枠」か「中身」のどちらかに風穴を開けてやや乱暴でも環境を変化させていくしかないと考え、筆者が選んだのは前者の方だった。

≪New Shape≫の実践はもう6年になり、これまで10公演ほど発表をしてきた。その制作は決して簡単なものではないが、同時にフロンティアに足を踏み入れるような興奮もあり、今後も実践／実験を続けていきたい。

ESG課題と哲学的発想

小野塚　惠美
社会と投資家の明るい未来をつくる「ESGの女神」

2020年10月18日のUTCPイベント「ビジネスの哲学化：なぜ、企業経営に哲学が必要とされるのか？」に参加させて頂いた。このイベントと私をつなぐキーワードは「対話」と「本質に迫る」であり、それを難しくいうと「哲学する」ということだと考えた。投資のプロである機関投資家が企業経営者と目的を持った対話を行うべきとする考えが、金融の世界に入り込んできている。私は、20年以上資産運用に関わっており、ESGいわゆる環境・社会・ガバナンスに関するリサーチと、投資先の企業との対話に従事してきた。現在は、投資顧問会社の経営者を経て、独立し、企業、投資家、政府へサステナブルな投資と経営の立場から助言する仕事をしている。

今、地球と社会の持続可能性が世界の課題になっている。金融業界でもそのような観点を重視する投資が年々増えている。ESG投資を含むサステナブル投資残高の進捗について、GSIRレポートにおける2016年と20年の世界各地域の持続可能性重視投資残高を比較すると、全体として54%、欧州を除く全ての地域で大幅に上昇している。（欧州ではESG投資の規律の厳格化により減少傾向。）日本では、474億ドルから2,874億ドルへ、506%増えた。日本の資産運用の担当者が今まで行っていた投資を「サステナブル投資」という新しい枠組みとして捉え直したたことが増加の主要因であり、これは投資におけるマインドセットの変化の表れである。2020年には、世界では35兆ドルを超える残高規模となっている。

サステナブル投資とは、企業や社会の持続可能性に注目して行う投資であり、慈善事業への資金提供ではない。サステナブル投資の中には、大別するとESG投資、インパクト投資とエンゲージメント投資がある。ESG投資は財務リターンの追求が強く、インパクト投資は、環境・社会へのインパクト達成の指標を設定して追求する一方、財務リターンは市場並み（同様の投資商品の平均程度）でも良いなど追求は弱めである、といった濃淡がある。エンゲージメント投資では、投資先企業との対話を通じて企業の行動変容を促すことに主眼を置いた投資となる。本稿で注目するのは、ESG投資の主流であるESGの要素を運用活動の各段階（投資対象の分

析、ポートフォリオ構築および投資先との対話）に含め、平均以上の財務リターンを追求するものだ。金融界は、サステナブル投資で財務リターンを追求する中で、社会や環境への良い影響をも追求していく方向にある。つまり、サステナブル投資は、金融事業そのものの持続性を追求する商品と言える。

今や、ESGすなわちE（環境）とS（社会）とG（ガバナンス）が、投資家の仕事としてだけでなく、投資される側の企業の経営にとっても重要になってきた。企業の業績にとってESGファクターが重要になってきたからだ。企業経営がESG課題に上手に対応することで、企業の競争力や差別化につながる世の中になってきた。今、ESG投資が加速する背景は、特に欧米において、企業の短期的利益の最大化がビジネスの目的となってしまい、その裏側に「利益をあげ株主分配を増やせ」という声高な投資家がいて、経営者側も頑張ったところ、ビジネスモデルがコスト最小化、（サーキュラーエコノミーに対して）リニアエコノミー（使い捨て）となり、環境資本をつぶしても利潤を挙げるということに邁進してしまったことにある。ここ数十年というだけでなく、そもそも産業革命以降の工業化、一般大衆を含む株式会社化（鉄道や鉄鋼業などへの小口リスク資金の融通）で見られた現象だ。

その結果、会社ごとに温暖化効果ガスの排出を制限しない、生産拠点を新興国に動かすなどのミクロの課題が、自然災害、異常気象に加え、大気汚染を起こして人々の安全・衛生問題になったり、低賃金問題が発生したりと、マクロ問題へと発展してしまった。今回コロナ禍が起こったことでそれらが更に表面化してきた。政情不安や人権問題についても、もともと火種があり悪影響は見えていたが、コロナ禍で表面化し認識が進んだ。並行して、新潮流（マクロトレンド）として、人口が世界全体としては増えても、地域により高齢化し労働人口減が進んでいる。テクノロジーも今までにない速さで進化、Society 5.0（産業革命が4.0だった）が叫ばれる。コロナ禍を背景に中央銀行が成長機会に対して過剰に資金を供給しお金がじゃぶじゃぶにある中で、どの分野への投資に回されるべきか迷う状況になってしまった。一言で言えば、工業化以来の環境・社会課題が社会基盤をも揺るがすような状況になっている。企業は営利団体ではあるが、こういった自分たちだけでは解決できないグローバルな課題に対応することを求められている。政府や国際機関の能力が限定的な状況下で、企業自身が経済価値と社会価値のバランスを取ることが重要となった、そんな世の中がきている。

投資家も企業も、さまざまなステークホルダー（利害関係者）との対話が重要だ。サステナブル・ファイナンスやサステナブル投資の世界では、ステークホルダーは株主だけではない。企業は、お客様、投資家、従業員、環境・社会的課題対応を推進

するNGO、NPO、政府などと、いろいろな対話をする必要がある。そのとき、投資資金の流れの中でのステークホルダーを押さえておくことは重要な考え方だ。私が所属する投資顧問会社は、資金を上場企業に投資しているが、実はそこに絡むお金と情報の流れがある。その出発点は個人で、個人が出した年金拠出(掛け金)をまとめて運用会社が企業に投資する。あるいは個人が投資信託を買うことを通じて出したお金をまとめて企業に投資する。今は個人が企業に直接投資することもあるので、企業としては、機関投資家だけに説明する、機関投資家の方だけ見た活動では成り立たない。最終受益者である個人まで見て、財務面・非財務面からの説明責任を果たさなければならない世の中にもなっている。

以前の私の会社は、アクティビストファンドと言って企業のオーナーである株主の権利に基づいて企業の価値をあげるべく経営者との対話をする。個人は、そのファンドへの投資家であり、投資先企業の従業員にも消費者にもなりえる、企業との間に幅広い関係を持つステークホルダーである。その活動の真ん中にいる我々は、個人との対話を重視し、ファンドに投資している個人の投資家の考え、あるいは将来を見据えたうえでの現在の課題を企業の気づきとしたいという想いがある。企業が経営において持つべきESGの視点を通じて企業活動の本質に迫ること(環境や社会に役立つ事業で利益を十分長期的に獲得しようとすること)は、財務リターンと社会・環境へのリターンの両方を追求することであり、決して理念や道徳のためだけに活動をするのではない。

それでもやはり、企業の課題解決＝利益を得ることと社会的な課題解決との矛盾を哲学で解決できるのか、という疑問が投げかけられよう。私が「哲学のビジネス化」ではなく「ビジネスの哲学化」に共感する理由の一つは、「社会課題や地球環境の解決は一社ではできない、究極の一つの解があるわけでもない」という認識にある。哲学という言葉に含まれる、対話、本質に迫る行為・活動が重要になっている。企業が課題解決への答えととるべき行動を探す中で、創業の意図を問い直す、企業の理念やパーパス(目的、存在意義)が重要になる。外から客観的に見た時にパーパスがなんなのかを問い直しかつ発信していく必要が認められてきている。

もう一つは、そうしたビジネスでの環境や社会の持続性の解決努力の結果として何が現れているのかを見ることができることだ。最近の研究結果の一つは、長期的視野で企業にとって重要な社会や環境の課題解決に真っ向から取り組んでいる会社の株価は、そうではない会社の株価パフォーマンスよりよかったことを示した。もう一つは、コロナが起こった時に人的資本、従業員の働き方、デジタル対応ができている会社の株価低下が相対的に少なかったとの結果だ。具体的な問題に出

会う前に企業がパーパスを考えることが、株価という一つの指標に結果として示されるようになってきている。それゆえ、世間知に流される目先の経営ではなく、企業として社会にもたらすものを存在意義として考える、つまり本質を追求する経営をする方が良い。この意味で、哲学という活動を事業に含めていく方が良いのだと、企業に話をしている。

それでも、哲学、本質、存在意義という言葉が浮いていないかとの疑問も寄せられる。金融の世界で言えば、ガバナンス改革をコーポレート・ガバナンス・コードなどソフトロー（例えば上場ルール）でやってきたが、海外投資家から見るとESGのGが変わっていない、流行りに乗っているだけ、忖度しただけ、空気を読んでいるだけ、との指摘がある。世界に比べて比較的平和で恵まれている日本の現状とも言える。平和であることは良いことだし、先人の功績の上に今の我々はある。しかし、未来はそうではないという危機感を経営者も投資家も持つべきだ。そのためには、広い世界を見ることが重要となる。ビジネスマンも学生も世の中を十分見ていない面がある。

今後、アカデミアや教育現場には、「明るい未来を作るのは自分だ」という思考を教育のベースとするようにリードしてほしい。日本人はリベラルアーツに弱く、なんのために学ぶかが抜けており、いつまでも暗記教育から抜け出せていない。一方で、当日のパネルで、アカデミアと実務家の間に入る人を半端者と見て価値や評価を低くする日本の傾向について批判があった。本来、中途半端とは多面性の裏返しでもある。経営者には、哲学思考で一つ上の立場から見ることで、実務界で哲学する人を包摂し、適切に価値評価できるようになって欲しい。

改めて、ビジネスの哲学化とは何か。ビジネスをするということはそもそも哲学的行為である。解のない課題に対して常に問いを立て続けながら、できるだけアンテナと立ち位置を高くし、対話に努め、もやもやした中でも継続的な成果を出すことだ。間違った設問に無理に一つの解を出そうとして、日本企業はリソースを無駄にしているのではないか。ビジネスを哲学化すると言うことは、解のない課題に対して、個人の短期的な経験や実践に基づく狭い範囲の世間知を用いるのではなく、一段上に視点を上げて、世界の中で、歴史の中で、共同体の中での自分自身や経営している会社を存在意義の観点から位置付け直し、今やるべきことを見つけようとする努力をすること、それを経営の生活のなかに置いておくこと、としておきたい。こんなふうにずっと考え続けることが哲学することかもしれないが。

恋愛やセックスの価値観について制作を続ける理由

abirdwhale Kakinoki Masato
アーティスト、研究者、音楽家

恋愛やセックスには「なんとなく正しい、望ましい」とされている価値観が、それぞれの社会、時代に存在します。そうした価値観を自明のものとして引き受けるのではなく、同じ時代に生きる人々と開かれた形で考察するためのひとつの方法として、制作をしています。「アート作品を制作している」と言ってしまうことも多いですが、それがアートであるかどうかは重要ではない気もします。その意味では、2020年の10月末から翌年6月にかけてスタートアップ事業として取り組んだ「あたらしい結婚」も、同じ文脈で振り返ることができる制作でした。あたらしい結婚において焦点となった価値観は「結婚は恋愛を入り口にすべき」というもの。「恋愛と結婚を結びつけるのは素敵なアイデアだけれど、あまりに支配的な力を持ちすぎていて、そこに収まらないあり方を望む人たちが困っているんじゃないか」という仮説をもとにした事業でした。アートにしても、事業にしても、恋愛やセックスにおける価値観というテーマが、このところはずっと軸にあります。「どうして恋愛やセックスなの？」と聞かれて、そういえば何でだっけなと言葉に詰まることが時々あるので、ここでその問いを掘り下げてみることにします。

最初に、恋愛における価値観について考えるようになった経緯を振り返ります。私はいわゆる「真面目で優秀な子ども」として育てられ、その期待に応えるべく、真面目で優秀なふるまいに努めました。読書だけは制限なく許されていたので、近所の図書館で児童文学を山のように借りてきては読み漁りました。一方で、大人向けの書棚を「行ってはいけない」場所だと思い込んでいました。一人で留守番していることが多かった小学校低学年の頃の夏休み、夕方の再放送枠で安達祐実が主演するドラマを観ていました。細かいことは記憶にありませんが、戦闘シーンがあり、ドラゴンボールや戦隊モノの延長線上でハマっていだのだと思います。ある日、家に帰ってきた母に「そんな大人の見るものを見ちゃだめ」と叱られ、大人向け＝子どもはふれてはいけないものという理解を強めました。結果として、毒の抜かれたものばかりを吸収して育ち、思春期の頃には「運命の人と出会い、恋に落ちて、結婚し、家族をつくる」ことを、幸福な人

生のゴールとして思い描いていました。だから25歳くらいのときに、二人以上の相手との恋人関係を望んでいるのかもしれないと自覚し始めたときには、「自分は異常者なんだろうか」と胸の奥が暗くよどみました。それからインターネット、本、イベントなどを通してポリアモリー(3人以上の当事者全員が合意している恋愛関係のこと)を知り、「一人と一人が結ばれることこそが幸福な恋愛のあり方である」というのが、ひとつの価値観でしかないことを理解しました。それをきっかけとして、恋愛における価値観を意識し始めました。一人の人を好きになるのか、そうとは限らないのか。男が好きなのか、女が好きなのか、あるいはどちらでもないのか。性的に惹かれるのか、性的には惹かれないのか。男らしくありたいのか、女らしくありたいのか、どちらでもないのか。そういった様々なことを自分に問いかけてみるようになって、そのときそのときの自分が何を望んでいるのかを見つめるようになりました。「自分は少しおかしい気がする」という状態から、現在の支配的価値観がどうなっていて、そこから自分がどうずれているのかをある程度把握できている状態への変化は、私の視界を大きく切り開くものでした。

恋愛の価値観について考えたり、調べたりしているうちに、必然的にセックスのことを考えるようになりました。別に恋愛関係にあるからといって、セックスをする必要はありません。恋人じゃない人とセックスしたっていいと思います。でも「しない」という選択も含めて、セックスと恋愛は社会的に強く結びついています。恋愛結婚の核には、夫婦間以外でのセックスの禁止と、「セックスをしている夫婦のほうが幸福である」という価値観が存在しています。また一対一の恋愛において「私とあなたが恋人同士になる」ということは、「私はあなた以外と性的行為をしないし、あなたも私以外とは性行為をしない」ということを一般的には意味しています。ただセックスは恋愛以上に語ることが難しく、私自身、セックスと自分の性欲を受け入れることを避け続けてきました。性的な感情を抱くこと、性的なことを話すこと、性的な行為。どれも悪いことだと思っていました。子どもの頃から性的なものに惹きつけられながらも、自身の性欲を忌々しく、そしてセックスを穢れた動物的な行為として見ていました。しかし23歳のときに初めて経験したセックスで、私は予期せず、その精神的な美しさに心を震わされました。驚いた私は、しだいにセックスと向き合うようになり、セックスや性欲を否定的に捉えるそれまでの自分の考え方も、あるひとつの価値観にすぎなかったことを知りました。

やがてポリアモリーを入り口に、あらためてセックスについて考えを巡らせるようになった私は、制作したものを媒体として、性愛の話をするようになりました。最初は食文化史に関連させる形で、性的な要素をサウンド・アート作品にほんの少しだけ差し込みました。翌年末には、森鷗外や夏目漱石の文章を借

りながら、私自身の性的および恋愛感情の発達を語るエッセイ映画をつくりました。それを展示空間に置き、観終えた来場者とお茶をしながら、「性的感情、恋の感情、愛の感情」について話をしました。作品を通して自分の性的欲望を暴露し、他者と落ち着いて性愛の話をすることは、自身の凝り固まった恋愛やセックスの価値観を形成し直す行為でもありました。自分が何を望んでいるのかを見つめ、それを否定せずに考えを整理していく制作と発表の過程は、ねじれた矛盾を長い間抱え込んでいた私にとって必要なことで、それは他の誰かにとっても意味のあることだろうと直感的に思いました。種類や大きさの違いはあっても、矛盾を持たない人間はほとんどいません。だから制作物を通して、そうした過程を鑑賞者と共有しようとしているのかもしれません。

何かを選択するときに、それが自分の望みなのか、社会の支配的価値観によるものなのか、あるいは両方によるものなのかを意識し、可能な限り、自分の望みに対して正直であることに、私は幸福な自由を感じます。もっと言うと、必要に応じてその望みを表明できる状態に自分を置いておきたいし、同じことを望む人がいれば力になりたい。本当の欲望を口にするのはときに怖く、心細いものですが、制作したものを介せば、直接書いたり、喋ったりするには違和感のあることも語ることができ、ときには対話の場を創出することもできました。また制作物に、アートや文学、事業などの文脈を持たせることによって、性愛の話をしようなんて思っていなかった人たちにうっかり届いてしまう可能性を生むことができます。誰かが、十代の頃の私が、私のつくったものに出くわし、それが彼らにとっての偶発的な問いの機会や、他者と性愛について話す場になるかもしれない。そんなことを思いながら、恋愛やセックスにおける価値観という領域で制作を続けています。

デザインを必要とする人とデザインすること

ライラ・カセム
アートディレクター 一般社団法人シブヤフォント・東京大学UTCP特任研究員

私は現在日本全国各地にある障害福祉事業所や施設（以後事業所・施設）で働く、主に知的障害や精神の病を持つ人々の社会参加と経済的自立を促すアート活動の支援と、その活動を通した商品やイベント企画などを現場の皆様とインクルーシブデザインのコンセプトをもとに協働し、デザインしています。
その中で、最も重要にしているテーマが「持続性」。それはデザインを必要とする現場の方がどうデザインを受け止め、その解決策を活用し続けることができるかということです。

無理をさせず現場を活かすデザインのつくりかた

現在日本の事業所・施設での月の平均賃金（＊1）は利用者１名あたり約18000円ほどとされています。年々国から利用者（以後メンバー）の賃金を上げていこうと推進する動きがあるなか、施設のスタッフや経営者は彼らの特性を活かせる事業形態を日々模索しています。そのなかでメンバーの特徴あるアートや創作活動をもとに自主製品などを作る施設が、この20年ほどで全国でも増えてきました。しかしそのなかでアートの創作的活動を活用できている施設の割合は全国的に少なく、多くはアート活動をやりたいがどう始めればいいかわからないままでいます。
ではそのようなスタッフやリソースがない施設はどうするのか？　この問いに対し私は約10年間活動を通して解決策を現場の人々とデザインを通して模索してきました。その中で、２つの重要なことに気づきました。

＊1 就労継続支援Ｂ型作業所の場合。重度の知的や重度重複障害を持つ方々が使う生活介護事業の場合は月500円にも満たないところもある（生活介護事業は賃金収益を元としていないので正式な全国統計は発表されていない）。

1. 現場のスキルをもとに活用できる手法を作る

私は大学院博士課程時代から約8年間足立区にある綾瀬ひまわり園の皆さんと活動を今も続けています。当初ひまわり園ではアート活動は盛んではなく、余暇活動として色塗りやお絵描きを週1回する程度。メンバーも軽度から重度の知的障害で年齢や身体性、認知特性も様々でした。1年間かけて様々な障害をもつメンバー特性やスタッフの支援スキルなどを分析したところ、創作活動をしている時に、支援スキルの豊富なスタッフがメンバーそれぞれの障害特性にあわせた支援ができれば、どのような人でもアート活動をサポートできるのではないかと考えました。メンバーの特性を共有しながら、私の創作の専門性とスタッフの支援スキルを組み合わせ、様々な方法やアプローチを試し、現場で調達できる画材や題材や手作りの道具を開発して、「創造能力を開花させる8つの方法」を当時のスタッフと2014年に編み出しました。すると、メンバーの自発的な創作力が芽生え、作り出すアートも華やかになるだけでなく、自傷行為が減る、できることが増えたなど、様々な相乗効果がありました。今ではアート活動はひまわり園の中で人気の活動のひとつとなり、支援スタッフ自身もこのような物も作れるかもしれない！と創作意欲が芽生え、現在オリジナルのデザイン商品も作ろうと一緒に検討中です。また私自身も様々な講演会やワークショップで全国を周り、施設の皆さんに方法などを伝え、様々な方に活用していただいています。手法の説明は施設のみならずより多くの人が使えるようにと、あえて確定させない柔らかい表現を使い、受け取る側の人が自分なりに受け止め活用できるように書いています。現場の人が自分達の力で前に進めると思えることが活動を持続していく糸口となると思うからです。

2. 共にインプットし支え合うものづくりをするネットワーク・コミュニティーをつくる

シブヤフォントは「渋谷でくらし・はたらく障がいのある人の描いた文字や絵を、渋谷でまなぶ学生がフォントやパターンとしてデザインしたパブリックデータ」として公開し、販売やコラボレーションをしています。渋谷区のおみやげ開発事業として2016年末に発足し、デザインを通して産官福学の領域をつなげながら、障害のある人の新たな収入源や社会活動の機会をつくり、6年目の今では法人化し30社以上の企業ともコラボレーションし、年々活動の幅を広げています。
私は2017年から参加し、アートディレクターとして文字や絵をかく施設のアーティスト、彼らをサポートする支援職員とデザインをする桑沢デザイン研究所

の学生の協働制作を見届けています。現在では11の施設が参加しており、それぞれアート制作の経験値が様々でありながらも、クォリティーの高い原画や文字の制作を「８つのメソッド」に基づいて制作しています。私は制作面で施設と学生側の中間にたち、それぞれの役割を明確化し、参加する人それぞれが最終アウトプットに貢献していると思えるように常に心がけています。
このプロジェクトの持続性には様々な理由がありますが、ひとつは人のネットワークとコミュニティーづくりです。その肝となるのが人とのコミュニケーション。区と施設と運営側との定期的な報告と議論の場を開き、企画や事業の向上を共に考えるだけでなく、フランクな施設職員とアーティストと学生の意見交換の場づくりや現場のアート制作の支援の課題などを共有し、共に解決できる施設同士の勉強会など、多面性のあるコミュニケーションの場づくりをしています。企業のデータ採用というビジネスの観点、学生の創造性を引き出し活用できるものへと変換するデザインの観点と、参加するメンバー（利用者）のウェルビーイングを考える障害福祉の3つの観点をつなげ、お互いがお互いから学び合える場をつくることで、シブヤフォントは形成されています。一人でも欠けたら成り立ちません。社会の現場ではものづくりのみに着目するのではなく、作り方や人の関係性にも着目していくことでプロジェクトの持続性がうまれるのかと、今は思います。

哲学的な考えから見えてくる新しい支援やサポートのかたち

私は活動の中で人の傾向を頭の中で定着させないことを常に心がけています。特に障害をもっていると、この人はこの障害だからこのような傾向があってこんな性格だね、とすぐに障害と性格が一直線に紐づけられます。しかし、このような思考回路だと支援やサポートの仕方も偏ってしまいます。傾向というものは一例やファクトの一つにすぎません。障害者という名詞を通して人を見ることと、人を通して障害を見るのとでは見解など変わるはずです。多くの人はこの人はここで生まれてこんなことやっているからこういう人、などと人をカテゴライズする癖がどうしてもあります。ただカテゴライズした時点で人の思考は定着しがちです。だからこそ、何事においても哲学のような柔軟な思考が必要だと私は思います。
哲学の意味を辞書で引くと、「人生・世界、事物の根源のあり方・原理を、理性によって求めようとする学問。また、経験からつくりあげた人生観」と出てきます。英語で理性は一言で訳せず　Reason（理由）と　Sense（感覚・感触・感性）の意味を持ちます。
なぜこの人はこのようなことをするのだろうと考えた時に、多くの人は理屈を

通してその意味を問うと思います。そして支援の現場に行く時につくづく思います。人の脳の中は見えないし、考えていることなんてわかりっこないと思い知らされます。この人はこういう障害だからこういう行動をするなどといったものはないのです。でも人間はみんな他人なわけで、障害があってもなくても行動はその人自身の意志や気分で変動するので、理屈でなんてわかるわけがないのです。ではどう理解していけばいいのか？
人の行動の裏には必ず理由があります。なのでその行動の裏にあるその人自身の背景と、もっている感覚をまず理解する必要があります。それは「対話」をすることと体を通して同じ時間や物事を共に「体感」することで明らかになります。つまり、対話から明らかになるReasonと体感からなるSenseの両方の共有が大事なのです。
理屈のみで人を理解しようとすると、そこから先の思考の発展がなくなり、もしまた何か違った行動をした時に解釈のズレが起こると思います。

私は知的障害・重度重複障害など認知特性が異なる方々と共に活動をすることが多いです。なかには言葉数が少なかったり非言語の方も多いです。そうすると従来の言葉を通した「対話」という手法のみでは決してその人のやりたいこと、やってみたいことはわかりません。まずその人の目や手の先を見たり、触覚などを通して好きな感覚などを探る所からコミュニケーションは始まります。そうすると数回会うことでその人にとっての「あの人」になり、段々と目の動き一つでその人の気分や伝えたいことがわかってきます。その個人の行動や感覚からその人にベストなサポート手法などを考えます。このような障害や行動傾向があるからこう接すると考えるのは逆に思考を狭めてしまうので効きません。

共に活動をしている障害福祉の現場で支援員のみなさんは「ひとりひとりできることを増やしていきたい」と口を揃えて言います。そして支援者と障害のある人との接し方を見ていると、それはとても哲学的な付き合い方だなとも思います。「利用者」と呼ばれる障害のある人を一人一人の個人としてみているからで、この人の障害を直そうとかではなく、〇〇さんなんでこういうふうにするんだろう？何が欲しいかな？こうやったら喜ぶかな？という質問を通した哲学的な考えで、自分自身や他のスタッフとの対話を通してベストなソリューションを見つけていきます。
支援は人を単に助けるという支援された人がサポートを受動的に受けることではなく、受けたサポートをもとにどう能動的にその人らしくできることの幅を広げられるかなのだと思います。
これは他の仕事や教育の場で活用できるのではないでしょうか？　例えば上

司や先生が、この人はこの役職やこの学年だからこれができるべきだと考えるのではなく、まずこの人はこの特性があるからそれを活かしてこの役割を全うしてもらうとか、この特性を活かせばこの学年のこの学びが身につくといったふうに考えれば、その人の本来持ってる可能性を広げていくことができるのではないでしょうか。
一度目の前の人にとりつく「立場」や「役職」を取り除いてみてみたら、いろいろ見えてくるはずです。

違った人と共にいること・生きること

様々な情報や人が世界中を交差する現代、いま我々は社会として多様性を受け入れていかなければならない世の中に生きています。多様性を受け入れなければならないという言い方が、なぜか「異物」を受け入れなくてはならないといったような上から目線で、かつ他人目線にしか聞こえなくて、本当にこのようなスタンスで多様性の受け入れが広がるのかと疑問が頭をよぎります。
マジョリティーというものはいわゆる現在の世の中のデフォルト設定にしかすぎないと私は考えます。何も設定を変えずに日々を暮らすというのは特権そのもの。でもこの設定に含まれずに日々、困難を抱えている人たちもいます。
このデフォルト設定に含まれていない違った性別、障害、背景や人生経験を持った人たちをマイノリティーとします。そうした時にデフォルトを変えることを多様性の受け入れと考えるか、デフォルト設定に追加機能を与えることと考えるかで見方が変わってきます。
前者の場合、既存の設定の中に新しい機能をどう組み込むかという考えの元も受け入れるので、既存のものを上書きするといった混乱や衝突を招く可能性が高くなります。一方後者は、今あるものをより豊かするための可能性として考えることができるのではないでしょうか？　パソコンやスマホなどひとそれぞれ自分が使いやすいように設定するように多様な視点や観点を取り入れ、社会の機能性をより豊富にするものと考えれば、世の中が良くなる可能性しか見えてきません。そしてより多くの人が追加機能を使ったり触れたりする機会が増えることで、その追加機能が今後のデフォルト設定に組み込まれることになるはずです。それこそが多様性を「受け入れる」世の中の姿勢だと思います。それぞれのマイノリティーが持っている観点を今の社会と照らし合わせ、どうやったらみんなが暮らしやすい生きやすい世の中をつくっていけるか。
つまり、マジョリティーの観点からマイノリティーを考えるのではなく、マイノリティーの観点からマジョリティーを考えて、世の中をよりよくしていく。このような考えこそ、人々の生活をよりよくしていくために必要だと思います。

多様な社会を作っていくには、まず正反対の立場から物事を考え、今現在の社会の傾向や課題と世の中に実在する障害というものを結びつけることが大事なのではないでしょうか。私の友人でキュレーターの田中みゆきさんは「障害は世の中を捉え直す視点」と定義しています。それは障害そのものを知ることで社会のさまざまな課題を解決していける新たな発想が生まれるという、障害や違いそのものが課題を解決するクリエイティブの源になるという考え方です。「違い」を捉えることで、自分と全く違う世界を生きる人は、自分の世界観を崩す脅威ではなく、自身の身の回りを見つめ直し、視野を広げさせてくれる哲学的な要素だと思うと、なんかワクワクしませんか？

「巻き込まれる」という生き方

片桐 暁
クリエイティブ・ディレクター／コピーライター

筆者はコピーライターという仕事を20年以上続けていますが、この仕事はよく言われるような「日本語のプロ」というわけではない気がしています。いえ、もちろんそういう側面はあるのですが、日本語能力はアウトプット時の条件みたいなものであって、経験的には、そこが最重要というわけではない。ではこの職業のプロフェッショナルたる由来はどこにあるのだ？と考えてみたときに、それは（逆説的ながら）「素人であることだ」というのが、現在の結論です。

コピーライターは、入ってきた仕事の分野について一時的に猛勉強し、伝えたいことを持っている企業/専門家（クライアント）と、それを伝えたい相手である人々（ターゲット）との間を、言葉で橋渡しするのが役割です。この時、勉強のベクトルを間違えるとよろしくない。クライアント側に肩入れしすぎて、そちらの皆さんの言葉で話し始めてしまうとダメなのです。あくまで「伝えられる側」の視線と感性をキープして、「この概念はここまで噛み砕く必要がある」「この単語は、受け手の立場になってこう言い換えよう」といったことを意識し続けては、表現に落とし込まないといけない。いわば「素人のプロ」であることが、この職業の重要な資質のひとつであるようです（プロはプロでも「素人のプロ」だなんて、お世辞にも威張れる気がしませんが…）。

個々の仕事は、基本的にこちらから選ぶものではありません。エイヤッと巻き込まれるしかない。昨日クルマの世界に巻き込まれていたかと思いきや、明日は化粧品の世界に巻き込まれているかもしれない。そんな日々の中で私が巻き込まれたのが、なんと“宇宙”でした。

2007年のこと。文部科学省が音頭を取って、『一家に1枚 宇宙図』という、人類がこれまで宇宙について知り得た知見を一枚に編集・凝縮するという、とんでもないポスターが制作されることになりました。私はこのプロジェクトにコピーディレクターとして参加し、以降、同一のコアメンバーによる『太陽系図』『光図』『シミュレーション図』『改訂新版 宇宙図』といった企画にも関わり続けてきました（ポスターは全国のミュージアム・ショップやAmazon等で購入することができます）。そしてこれらの仕事が私に、巻き込まれることの豊かさ —な

んとなくこの仕事に感じていた面白さの真髄— を、改めて教えてくれたのでした。プロジェクトの構造を私なりに分解すると、次のようになります。

1. 知のエディット：ポスターの制作
2. 知のリミックス：各種イベントの開催
3. 知のバイラル：オーディエンスへの拡散

典型的には1.でお仕事の発注があり、デザイナー、科学者、サイエンスコミュニケーターといった皆さんとの顔合わせを経て、制作がキックオフされます。『宇宙図』では、宇宙図制作委員会を初め、多数の人々の関わりと協力によって制作が進められました。無数のブレインストーミングがあり、膨大な資料の読み込みがあり、幾つものミーティングを経て、徐々にポスターがかたちづくられていきます。当時は東大の院生だった高梨直弘さんがポスターを方向付け、デザイナーの小阪淳さんが斬新かつ科学的なアプローチで精緻なビジュアルを紡ぎ上げて、紙面上には、これまで人類が宇宙に関して知り得たこと、あるいはこれからも原理的に決して知り得ないことが、ここにあそこに表現されていきました。議論はオンラインでもオフラインでも白熱し、交わされたメールは2,200通以上。バトル一歩手前になったことも数知れず。関連各位の意見の相違を筆者がテキスト上で調整することを買って出て、サンドバッグになったことも数知れず。そんな7ヶ月を経て、『宇宙図』はこの世にデビューしたのでした。定着されたテキストは1万数千文字。ここに展開されたのは、まさに知のエディットでした。

これらのプロジェクトはポスター制作で終わりではなく、「天文学普及プロジェクト 天プラ」等の主催による、多くの関連イベントを伴うところも特徴です。イベントではこれまで、哲学者、美術史家、理論物理学者といった方々をゲストにお招きしては、鼎談方式で、異種格闘的に、宇宙の不思議や人類の営みを語り合ってきました。これに巻き込まれたことには、私もびっくりでした。「コピーライターは縁の下の力持ちであり、名無しの仕事人である」と思っていたところ、このようなきっかけがなければ決してお会いすることのないような専門家の方々とお話しする機会に恵まれたのですから。これらイベントは触発的な対話の契機となり、あるいは自分の関わった仕事を反省的に捉え、自らの中でいっそう熟成・発酵させるトリガーともなりました。こうした出会いがもたらしたのは、知のリミックスでした。

本ポスターやイベントのポイントは、「巻き込まれた」側が、今度は不特定多数の人々を巻き込んでいく、という側面にあるのかもしれません。ポスターのリリースと同期したイベントの多くは、YouTubeやUstream等、インターネット

でも配信されました。来場者にはポスターが配布され、オンラインの視聴者にはダウンロードリンクが示されました。イベントでは会場からの、あるいはネット上の反応をピックアップしての、熱い質疑応答が繰り広げられました。つまりポスターのリリース、及びこうしたイベントは、「知のエディット」「知のリミックス」を受けた「知のバイラル」としても機能したわけです。

ところで、コピーライターの仕事におけるどのような学びも、この世界や社会、人間に関する、なにがしかの教えを与えてくれるものではあります。しかし本プロジェクトによって私が与えられた「自分ごと感」は、いかにも突出していました。

『光図』を例にとれば、そこで取り上げられているトピックは、可視光線によって見えているこの世界に始まり、相対性理論や場の量子論、科学哲学にまで及びました。すなわち、私たちの世界がミクロではいかに振る舞い、マクロではどのように振る舞い、その背景に実はどんなルールがあって、それを人間がいかに識るのか、という話題までが網羅されていたのです。この一連の内容を一万数千文字のポスターにまとめる作業に関わることによって、私は、私を存在させているこの世界について、これまでより一段深い知識を与えられ、世界の凄みといったようなものを知った感覚にとらわれました。

また『太陽系図』では、紀元前の、占星術が極めて重要な意味を持っていた時代の人々の心の声に向き合い、耳をそばだて、その切実さに、資料を通じて接近してみることを試みました。老若男女を代弁する役割を託されたコピーライターには、「他者の考え方や心の動きに同化するよう努めてみる」能力が必要とされますが、それがより先鋭化されたかたちで『太陽系図』の作業には内在していました。そこには「いま、ここ」を超えた、他者からの、未知や外部、世界からの学びがありました。

以上述べてきた巻き込まれ方は私のいち体験談に過ぎないのですが、ここに象徴的に示されているように、実は「巻き込まれる生き方」には、思った以上の普遍性があるのではないか、というのが私の考えです。それは語感と違って、積極的な生き方なのです。

巻き込まれている状態とは、自分以外の何かに奔流のように取りまかれ、押し流されている状態です。この際、その流れは「未知」や「外部」「想定外」との出会いを運んできてくれます。これこそ実は、日々の生活の中、努力しなければなかなか手に入らないものなのではないでしょうか。人間、年を経るにつれ、自分自身が何者かということはよくわかるようになってきます。自分と折り合いをつけることも容易になります。一方で、「無批判に自分自身でいることの危うさ」のようなものもまた、顕在化してくる気がします。自分でいる限り、いつまでも変わらず、その同じ自分でしかありません。近年話題の「フィルターバブ

ル」なども、うかつにしていると自分から外部性が欠如していく問題として捉えうるのかもしれません。あるいはAmazonなどの協調フィルタリング（「あなたへのおすすめ」が自動的に表示される、アレです）も、勝手に私をプロファイリングし、その「私らしさ」で私を包んでくる力として考えることができるでしょうか。私で居続けることは、どうやら本質的にラクなものらしい。対して、未知や外部、想定外に付き合うことは大変ですが、真正面から向き合うならば、人生を都度、アップデートしてくれる、そんなきっかけになることでしょう。

また、巻き込まれる生き方は、他者と協働する生き方でもあります。他者とともになにかを生み出す作業は、コラボレーション…といえば聞こえはいいですが実際には泥臭く真剣で、場合によっては面倒なぶつかり合いであり、そこでは自分の知識や姿勢、信念までもが問われます。さてここでぶつかりあった結果、「参った！相手が正しい」としましょう。するとここに、新たな学びを得て、自分をただす（変える）契機が訪れるでしょう。巻き込まれているはずが、いつの間にか、主体的に自らを変えていこうというようにスタンスが切り替わっているわけです。かくしてそれは、語感とは異なる、積極的な生き方になるのです。

出会いのサインやチャンスを見逃さないようにとは、人生への処方としてしばしば語られることです。ここでは同じようにして、「巻き込まれる」サインやチャンスを見逃さないようにということを（自戒も込めて）主張して、本稿のまとめとしたいと思います。本当に面白いことは未知や外部にあり、すなわちそれは、世界の方からしかやってこないのですから。

失礼合戦

加藤 雅子
imigongo anywhere 代表

たまになんのメッセージも添えられずにfacebookに友達申請が届くことがある。
お会いした記憶はない。だからと言って完全に繋がりがないわけではなく、共通の友人が1人か2人、ちらほらといたりする。どうしよう。facebookは直接面識のある方・接点のあった方のみとつながる場として使っていて、さらには友達申請をする際には一言添えてほしいなぁという願望があったりするが、そのことを前面に明記しているわけでもない。それなのに「こちらの要望を察せよ」というのは傲慢すぎると分かっていながらも、一言添えるって礼儀じゃない？とも思ったりする。でも言い出せない。申請の際には一言をーなどと表に書くのは偉そうだし野暮だし。そうしてうやむやにした申請は100件を超えてしまった。

礼儀やマナーや慣習。暗黙の了解としてそこに広がり、言われなくても守るのが善とされるが、それを知らない者からすれば言ってもらわなければ分からない。異なる背景を持つ者が一緒にいる際にじわりと浮上してきて、見過ごせるものもあれば、気づくと怪物のようになっていることもある。

私の通っていた中学校では、集会などで体育館に集まると「黙想！」と先生から掛け声がかかり、その瞬間生徒たちは体育座りのまま顔を膝と膝の間にうずめ目を閉じて黙った。後から体育館に入ってくる生徒もその空気を察して黙って床に座る。次第に人がたくさん集まる際には黙って待っているのがマナーと刷り込まれていき、黙想！と掛け声が掛からなくとも生徒たちは静かになっていった。

3年生になって、転校した。始業式のため体育館に集まった生徒を見てそれはもうカルチャーショックだった。響き渡るおしゃべりの声、座らずに駆け回る生徒、ボールで遊んでいる人までいる。クラスの列を抜け出して他

のクラスのエリアをうろうろしている人もいる。開始時間になり、先生が大声を張り上げて「静かにしなさい！静かにしなさーーい！」と叫んでいても効き目なし。おしゃべり盛りやんちゃ盛りの10代にはあの怒鳴り声もBGMでしかない。人が集まる時には静かにする、というマナーは前の学校だけでの話だったのか？そういうものだと思って生きてきた前提をひっくり返された。

社会人になり、あるときランチ会に参加した。知っている人も知らない人も入り混じるその場で、ふとかけられた声「その服似合ってますね」。謙遜するのがマナーだと身につきはじめていたのでやんわりと「いえいえ、そんなことないですよ」と答えると「ん？私が嘘を言っているとでも？」と怪訝な顔をされドキッとした。このときはじめて謙遜が相手の意見の否定になることもあると知った。月日が経ち、なんの縁だか別の方から再び「その服似合ってますね」と言われたときに（よし、きた！これは前回の反省を活かして、、、！）とやや力がこもりながら「ありがとうございますー！」と満面の笑みで答えた。すると「いやいやいやいや、そこは、そんなことないですーと言うのがマナーでしょ」と呆れ気味に言われ、全く暗黙の了解に振り回されていた。今思えば、そんなことをわざわざ口に出して言ってくれた両者はツワモノだ。

日本国内でこの調子だ。ルワンダに住み始めてますます無言の前提に振り回されることになる。

友人の家に招かれて数名でお邪魔すると、飲み物とゆで卵が出された。ソファーに座りながら器に盛られた大量の卵にみな素早く手を伸ばし、ローテーブルの端でカンカンと割り始める。ヒビが入った次の瞬間、剥いた殻を床に投げ捨てた。何の躊躇いもなく揃いも揃って全員ポイポイ。一応ここは人の家である。室内である。その様子にびっくりして眺めていると、つるんと剥けた卵に塩をかけ始める。大胆にこぼれる塩。もはや床に塩を振っている。しかし客人も家主も何も気にしていない。
我が家に招いたときも同じだった。豪快な散らかしに加え、揚げ物を掴んだその手を我が家のソファーでしっかりとぬぐった。思わず声が出てしまい慌ててティッシュを渡す。受け取って「あー、ありがとー」とは言うもののごめんとは言わない。
ミーティング中に「ちょっとペン貸して」と言われて、持っていたノック式ボールペンを渡した。向かい合って話している間、ごく自然に貸したボー

ルペンを咥え始める。(咥えてるなぁ、嫌だなぁ、、)と脳裏をかすめながらも打ち合わせを進める。そんな気持ちをよそに彼の顔にペンが触れる頻度が上がる。顔面を駆ける私のジェットストリーム。よし、目指すはあのゴールだ！と言わんばかりにその動きを増し、遂にノック部分でダイナミックに鼻をほじり始めた。決まった。もちろん、打ち合わせ後には何事もなかったかのように返してくれた。

人のものは汚さないこと、丁寧に扱うことをマナーとして教えられてきた自分にとって、これらはどう考えてもマナー外の行為だった。驚きと嫌悪と苦さが同時に来る。しかしこのマナーはここでは「汚れたらきれいにすればいい」の考え方に回収される。

・

個人の電話番号が簡単に扱われどこでもかしこでも連絡先を聞かれる。郵便局のスタッフさんにも、スーパーのレジスタッフさんにも、道端で少し話した人にも、食堂で隣に座った人にも、バイクタクシーの運転手さんにも、あまりにも滑らかにすぐに聞かれる。断る理由も特にないので交換するとその後が大変だ。「hi」とだけメッセージが来る。hiと返すと「調子どう？」と返ってくる。「いいよ、あなたは？」などと中学校の教科書のようなやりとりをすると、その後ぱったり来なくなる。あれ？用事は？何だったの？そして翌日再び「hi」とだけ送られてくる。hiと返すと「調子どう？」と返ってくる、その繰り返しだ。何の用件もなく、挨拶だけが毎日送られてくる。一人だけではない、複数人からのhi。繋がりを確認しておくための手段なのだろうなと想像しながら、さして重要度を感じられずに作業にも似たhiの応酬を続けていた。そしてあるとき届いたhiをすっ飛ばしたメッセージ「なんでmasakoはhiって送ってくれないの？」ビリビリと衝撃が走り振り返る。確かに送られてきたhiには回答していたが、私からhiと送ったことは一度もなかった。「自分からhiって送らないと自分のことばっかり考えてる自己中な人だと思われちゃうよ。あなたを気遣ってるよ、というのは行動で示さないと。」

国内の遠方移動にはバスを使う。鉄道はない。日本でいうマイクロバスに近い形状の車で、他のアフリカ諸国と比べると比較的稀な「満席にならなくても時刻通りに発車する」システムだ。時間帯や行き先によってはガラ空きのまま出発することもある。その時も私ともう一人しかバスに乗って

いなかった。定刻での出発と同時に襲いかかる強烈な眠気。二人掛けの窓際の席で気が遠のくーーーポカポカ陽気で気持ちよく入眠。のはずだったが、ガンっ！！と音がしてドアが開きおばちゃんがギリギリで飛び乗ってきた。ふうー間に合ったーとの様子で車内を見渡した後に躊躇いもなく私の真横に座った。二人掛けの席。もう一度言うが、車内はガラ空きでそれ以外にも選べる席はたくさんある。息を整える恰幅のいいおばちゃんにぎゅうと押されながら驚いていると矢継ぎ早に色々話しかけてきた。ルワンダ語がさっぱり分からず笑って誤魔化す。そこに再び来る眠気。起こすようにまた話しかけてくる。ごめん。うとうとに耐えきれず無視して寝ようとするとちょっと変な顔をしていた。「なんであんなに席空いてるのにわざわざ真隣に座ってきて、しかも話しかけて来るんだろうねー？」と後日友人に話すと「一人で寂しいと思ったんじゃない？寂しさを埋めてあげようっていう気遣いだと思うよ。バスでは知らない人同士でおしゃべりするのは当たり前だし。無視するのは良くないよ。」

2日間挨拶しないと「ひどい！嫌いになったのね！」と冗談を言うご近所さん。「いつ家に来てくれるんだ」という電話を早朝にたびたびかけてくる遠くに住む知人、先週お邪魔したばかりですけれど、そして今5:30amですけど。

相手の時間を極力奪わないようにする、そっとしておくという配慮はここでは無礼になることがある。「ご迷惑にならないように」が迷惑になることもある。できるだけずっと繋がっておくこと、できるだけ多重の関わりを持っておくこと、自宅を訪問する・訪問されるを繰り返すこと、そして人を一人ぼっちにしないという種類の配慮がある。

礼儀と失礼は簡単に入れ替わる。失礼なことをするなぁと思いながら、私自身がたくさんの失礼をしでかしていた。それを教えてくれる人がいたから失礼だったと気が付けたが、言われるまで分からなかったものがほとんどだ。暗黙の了解は踏み越えてはじめて気づく。破られてはじめて大事にしていたものを知る。人と一緒に生きていくこと。それは踏み越えたり、踏み越えられることにも醍醐味がある。ざわつくこともあるけれど。各々が持つ際。フラフープのようなものを身につけて。それがぶつかったときにズンっと押しはねるよりも、ぶつかった個所から互いに溶けていく。途切れた円から流れ出して見える輪の外の世界。相手が大切しにしていることに従いきって自分の調子が狂うのはまた別の話だが、相手が大切にしていることを一緒に大切にできるスタンスを長らく模索している。国レベルで

も地域レベルでも組織、集団、家族、個人レベルでも、大切にしていることは層のようにたくさんある。誰かに大切にされているものごとがある、そのこと自体が微笑ましい。踏み越えたり踏み越えられたりしながら、互いの大切なものを探っていき、大切だねぇと穏やかに一緒に眺められる。それに向かう旅をルワンダで続けている。今日も「食え食え全部食え」と客人には腹一杯食べさせる気遣いと暴発寸前の胃袋の狭間で。

（ルワンダの全てがこのようだとは限りません。ごく個人の体験です。）

ミサイルのボタンを押すな

加納 穂子
八丈島ドロップス　もののけソーシャルワーカー

10月のあの日はいい天気で、空気がキラキラしてたな。空港まで出迎えに行って、そのままいつもとーとーめ（島の言葉でにわとり）のえさをもらいにいくホテルに寄って、とーとーめ小屋まで行った。ホテルの駐車場でたしか寺尾さんは、山の鳥の声を聞いていたな。

平飼い自然養鶏とーとーめ、は遺伝子組換え飼料に頼らずに、できるだけ島で手に入るものをごはんにしてとーとーめを養い、たまごを産んでもらうことをしている。たまごはすごい。あたためるとひよこが出てくる。いのちのかたまり。
２月の今は、朝のたまご拾いで触れる産まれたてのたまごが、かじかんだ指先にほんとうにあたたかくて、いつまでも手に包んでいたくなる。小屋から出てきたとーとーめは、だいたいまずはえさが積んである車に飛び乗っていくけれど、そこらに生えてるよもぎの新芽や「ねぶだち」（やぎめも好きな草、白から青の小さなぽちぽちの花が咲き、実になる。ずっと名前を知らなかったけど、４年前くらいに始めたよけごんで、よけごんに来はじめたばかりのTさんに名前を教えてもらった。ちなみに、やぎめは島の言葉でヤギのこと）やらをついばんだり、池面を掘っくりかえして好きな虫を探したり、日なたぼっこする。
とーとーめの日なたぼっこは、眺めてるのがうれしい時間。横になって羽を伸ばしてまぶたを閉じてお日さまを浴びる。よけごんにたまに来ているMさんが家から出ない生活の中で冬の寒さと暖房について「お天道さまが一番あたたかいです。ストーブは目じゃないです。お天道さまにはかないません」と毅然と話したけど、日を浴びるとーとーめを見ていると、そういうことなんです。

このように自分の在り方にのっとって生きてる生きものがそばに居るのがわたしのうれしい在り方なのですな。自分がソーシャルワーカーと名乗る理由についてあの時話したと思うけど、簡単にいうとただこれだけの事を考える人の肩書として使っている。なんでも有りの何でも屋である。もちろん、社会福祉士の資格を持っている事で社会的にはもの申しやすい。

世の中の仕組みや環境で生きていくことの困りごとが発生しているなら、どうにかできることないかと考えたり、ただ、関わる。
よけごんに、最近来てないMちゃんは自分のことを「誰か入ってきて、のっとられてのっとられてして消えちまうんだ」とよく話していた。そんな恐ろしい世界で生きているMちゃんの周りでただわたしはうろうろとしてたまに一緒に笑ったり、はなうた歌ったり、星を数えたりしている。

人と関わることは風がおきることだと思っている。
寺尾さん、風のかみさまのこと調べてるって言ってたな。

島は風が強く、特に冬は冷たい風がびゅーびゅーと吹く。身がすくむ。
その風は、よけごんの庭の「うちむらさき」(ザボンの仲間らしい、巨木に成る大きな柑橘果実)の実をぼとりと落とす。

10月のあの時には、まだ青い実だったうちむらさき。
ぼとりと落ちてくるまでに、よけごんには幾度も人がやってきては帰っていった。

おととい、「ずっと家に居てひとりで、人に会う機会がないから行ってみようかと思って」とよけごんに見学に訪れたTさんと話したら、「自分がここで役に立てるのか、役立たずでも来ていいのか」と不安を口にした。よけごんは、役に立つという価値で来る場所じゃなくありたくて、よけごんが自分自身の役に立つかどうかなんです。一億総活躍はくそくらえである。

ただ、人と人(生きものと生きもの)が関われば風がうまれる。そういうことを感じられる場所でわたしは生きていきたい。

寺尾さんはトンネルを掘って行ったら別の穴につながっていく話しをしていた。土がまだ保育園に行っていた頃、熱海の砂浜で友人たちと酒を飲んで過ごして、眠って、砂浜で朝を迎えたことがある。
日が昇ってきて、わたしは砂山を作り始めた。土が起きたらびっくりするくらい大きい砂山を作ろうと思って、どんどん大きくしているうちにみんな起きて、砂山を一緒に大きくしていった。砂山の向こう側にいる人が見えない、大人の背丈ほどもある大きく高い砂山ができた。
で、トンネルを掘った。砂山にトンネルを掘りたくなるのは、その向こうに抜ける欲求に純粋に向き合える楽しさと、トンネルの中で誰かの手に触れることの

面白さだと思う。トンネルは、何かにどこかにつながるためにある。
砂山を４人くらいの大人と、ちいさい土で囲んで、思い思いにトンネルを掘った。
自分が掘ってるトンネルに、誰かが掘ってきたトンネルがぶつかって右や左や意外なところでつながって開通した。
自分が掘ってるトンネルと誰かが掘ってるトンネル。開通したときに指先に感じる風。

10月の来訪は、いい風でした。

あの10月の日と同じように晴れた日に、ミサイルのボタンを押すな。
押すな、のために何ができる？

と唱えつつ。

2022年2月24日

※よけごんとは　　地域活動支援センターよけごん。障がい者総合支援法に基づく地域生活支援事業を根拠とする。一般社団法人八丈島ドロップスでは、障がいや認知症などあってもなくても人が集まれる場、を目的としている。
よけごん、は島の言葉で「良いように」というような意。

哲学との出会いで見つけた「自分らしさ」

上水　陽一
宮崎県教育庁・教育政策課　指導主事

梶谷先生との出会いは、今から８年前の2014年まで遡ることになります。思えば、この８年間で哲学と教育の関わりだけでなく、私自身の価値観や教育観まで大きく変化したように感じています。このブックレットの執筆にあたり、まずはこの８年間の経緯を簡単にまとめてみようと思います。

当時、私は宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に教諭として赴任しており、総合的な学習の時間（現在、総合的な探究の時間）のカリキュラム設計の担当をしていました。2014年から文部科学省「スーパー・グローバル・ハイスクール事業（SGH）」の指定を受けて、いい意味で“変わった”カリキュラムを設計する狙いもあって、「哲学」という学校現場ではこれまで馴染みのない分野を取り入れることになりました。とはいえ、学校職員からは「哲学対話って何？　教育活動にどんな効果があるの？」という批判的な声も少なからずある中で、担当者として自信を持って応じることができなかったことを覚えています。そのような状況の中で、初めて梶谷先生を学校にお招きした際に、近隣中学校や地域住民まで招待し、体育館で哲学対話イベントを実施したことは、大きな１歩となるチャレンジでした。

「何を言ってもいい」「分からなくなってもいい」「否定はしない」という哲学対話のルールは、正直なところ“これまで”の学校教育における当たり前を覆す考え方であり、一番戸惑っていたのは大人（教員）でした。実際に、哲学対話イベントでは、中高生が学校や世代の枠を越えて、自由に考え、対話を重ねる姿が見られました。地域住民だけでなく私たち教員も対話の輪に混ざりましたが、何か“答え”を意識して話してしまう「教員としての自分」がいたことを鮮明に覚えています。しかし、そんな自分の価値観に気付かされた哲学対話との出会いから、この８年間の自分の変化が始まったことはいうまでもありません。

五ヶ瀬中等教育学校は１学年40人定員で、前期課程（中学校）と後期課程（高等学校）の６年間を通した中高一貫教育を実践している全国初の公立中等教育学校です。「九州のへそ」とよばれる位置に存在する五ヶ瀬町に、県内一円から

生徒が集まり、小学校を卒業した子供たちが全員親元を離れて寮生活を送ることが入学する条件となります。五ヶ瀬町は、人口が約3400人程度、第１次産業を主体とした“小さな町”です。大型ショッピングモールはもちろん、コンビニエンスストアやファミリーレストランもありません。また、寮生活ではスマートフォンやゲーム機器の持ち込みは禁止となっており、朝７時の起床から夜11時の消灯まで、２人１部屋の共同生活を通して「人間力」を育みます。このように、12歳までの“当たり前”の暮らしから一変した生活を６年間過ごす彼らにとって、友達や教員、地域住民との「対話」は大切な“暮らしの一部”といえます。このように、五ヶ瀬中等教育学校において哲学対話を教育カリキュラムの中に位置づけることは、ある意味で“必然”だったと思います。

また、SGH事業で取り入れた哲学対話は、単なるカリキュラムとして完結することなく、ホームルーム活動や寮生活の中でも積極的に活用されるようになりました。あるクラスでは、教室の中に「哲学対話のルール」を掲示し、コミュニティボールを配置しました。寮生活では、全学年が混ざって話し合い活動を行う際に、生徒たちがファシリテーター役となって哲学対話を実践しました。このような波及効果は、正直なところ2014年当時は“想定外”だったのですが、「安心安全」な対話を経験した生徒ならびに教員が、自分たちで取り組むようになったのだと感じています。それは、これまで“当たり前”だった「予定調和」の話し合い活動から脱却し、それぞれの考えや思い、問いを自由に出し合う「安心安全」な対話の可能性を自ら実感したからこそ、生まれた変化だったのではないでしょうか。

哲学対話を取り入れた活動は、五ヶ瀬中等教育学校での活動だけに留まらず、近隣学校の生徒や教員にも拡がり始めました。2015年から現在まで、毎年11月に近隣中高生が集まって行っているシンポジウムでは、高校生がファシリテーター役となり、中学生との地域課題について対話を行っています。また、県内教員を対象とした研修会では、教科での活用をテーマとした哲学対話ワークショップを実施し、教科書等の教材から問いを出し合い、学びを深める対話を体験することができました。実際、私は学校現場で数学を担当していましたが、「美しいと思う定理・公式は何か？」「ゼロは存在するか？」「全ての事象を数式化できるか？」など、単元の最後などに哲学対話を取り入れて、生徒と輪になって対話を楽しんでいました。知識や技能の習得ではなく、思考や表現の深まりを自ら実感することを目的とする意味で、大変意味のある授業だったと自負しています。

さらに、SGH事業が終了した2019年から文部科学省「地域との協働による高

等学校教育改革推進事業・グローカル型」の指定を受けて、総合的な探究の時間を再考することになり、その中核となる資質能力として、“問う力”を位置付け、哲学的思考をさらに重視したカリキュラムを編成しました。６年間を３つのフェーズ（基礎期・充実期・発展期）に分け、その真ん中に位置する「充実期」で哲学的思考を深めるカリキュラムを設計する際に、SGH事業で取り組んできた哲学対話のノウハウが大きく生かされています。“問う力”を育むためには、自らの経験や体験に基づいた、手触り感のある「問う（疑問）」が重要です。そのような問い（疑問）を立てる上で、他者と自由に対話しながら、自分の考えをまとめ、振り返ることは大変効果的であり、哲学対話の手法が有効だと感じています。

また、五ヶ瀬中等教育学校は前述のとおり全寮制のため、日常的に「問う・問われる」機会が多いことも、哲学的思考を深める一助になっていたといえます。例えば、清掃や食事など日常の些細な場面においても、これまで異なる家庭環境で育った他者と上手く折り合いをつけながら生活することが必要となります。価値観や経験の違う他者と擦り合わせを行うためには、対話は欠かすことができません。五ヶ瀬中等教育学校では、総合的な探究の時間のカリキュラムの一部だけではなく、日常生活の中にも哲学的思考が必要な場面が散りばめられており、それらが有機的につながっていたのだと思います。

このような８年間の活動を経て、私は五ヶ瀬中等教育学校での10年間の勤務を終えて、2021年４月から宮崎県教育庁・教育政策課に異動となりました。ここからは、学校現場を離れた“いま”感じている、私自身の価値観や教育観の変化について、書き留めておきたいと思います。

教員生活がはじまった頃、先輩教員から言われたことは「先生」の心構えと振舞い方でした。大学卒業後の私にとって、それは“生徒に舐められない”ことであり、肩肘を張って“自分を大きく”見せていたことが忘れられません。いま思うと、毎日が“自分らしくない”日々だったと思います。宿題漬けの学習指導、礼節だけを重んじた部活動指導など、自分をごまかしながら「先生」を演じていました。しかし、20代も終わりに近づいた頃、むなしさ、苦しさにも似た“違和感”を感じていたことを覚えています。

そんな頃、五ヶ瀬中等教育学校に赴任し、前述のように哲学対話との出会いがありました。「間違ってもいい」「分からなくなってもいい」という哲学対話のルールは、私が感じていた“違和感”に真っすぐに刺さりました。「先生でなくてもいい」「生徒と一緒に学びを創ればいい」、そう思いなおすことができました。哲学対話の輪の中で、参加している全ての人と一緒に学びを創り、共有できる感覚を知ったとき、「教員になりたい」という夢を初めて言葉にした、高校生の

頃の自分の気持ちに戻れたような気がします。それからは、授業はもちろん、部活動やホームルーム活動など、どんな場面でも“自分らしく”関わることができるようになりました。そして、生徒や教員、地域の方々と関わることが楽しく、自由に考え、話すことができるようになりました。

以前参加した哲学対話イベントの中で、「コロナ禍で、世の中にオンラインが普及したことで、学校に行く、会社に出社するというこれまでの“当たり前”が覆されて、自分らしく生きることが許された気持ちになった」という参加者のコメントを聞いたことがあります。中でも、“みんな同じが善し”とされる学校文化では、“自分らしく生きる”ことを否定されてきた子供たちが少なくないのかもしれません。哲学対話では、考えることや話すこと、聞くことのすべてが自由です。予測不可能な時代を迎えたいま、正解や間違い、そして未来は誰にも分かりません。だからこそ、目の前にある“いま”に目を向け、“自分らしく”生きることしかできないのだと思います。教員の私が哲学と出会い、こんなことを自由に考えることができるようになった“いま”を、本当にうれしく感じています。

最後に、取り留めのない文章となりましたが、哲学との出会い、そしてブックレットの執筆を通して自分の変化を振り返る機会を与えていただいた梶谷先生に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、これからもどうぞよろしくお願いします。

Knowledge Forest 知の森と哲学対話

河本 有香
ブランドデザインディレクター/デザイナー

「哲学×デザイン」の出会い

私が梶谷さんに初めてお会いしたのは、2017年に行なわれた、大学の先輩水内智英さんとの「哲学×デザイン」対談イベントの場だった。勿論対談も面白かったが、内容以上に印象的だったのは梶谷さんの人柄だ。イメージしていた哲学者とは大きく異なる、「何でも軽やかに笑顔で肯定される器の大きな方」にすっかり魅了されてしまった。そしてこの「大きな器」のイメージは、その後参加した哲学対話や、私の思う「哲学×デザイン」のキーワードにもつながるところである。

この会で初めて出逢った哲学対話は、「自身の素直な考えを発する事で、他人と対話し、考えを巡らす場」として大変共感し、私が主催する参加型インスタレーション「Knowledge Forest知の森」とのコラボレーションを依頼したのだった。後日、東京で開催した展示に梶谷さんにも来場いただき、「個人が考え、繋がることを身体的に実感できる事が面白い」と協働ワークショップ開催が決定した。

Knowledge Forest 知の森

「Knowledge forest 知の森」(以後、知の森)とは、木や森をメタファーとした、成長する参加型インスタレーションだ。“人は皆頭の上で自身の「知の木」を育てており、それを周りの人と共有する事で、「知の森」を一緒に育くむ事が出来る”という物語を描き、それを可視化したインスタレーションを図書館や公共施設で開催している。

「知の森」を介して、参加者が自身の「知」を発信し、人や新たな知と繋がる体験を促す。そうすることで、人が自然と集う場に開催地を変化させる事を意図している。地域やまちづくりにつながるプロジェクトだ。

私が事前に製作する造形物は、知の森の土台と、葉っぱ型の紙だ。まず広い空間に直径2.5m程度の大きな円を吊り、そこから紙紐を沢山下げる。大人4人位が中に入れるこの空間が「知の森」の土台となる。そして「好きな本と、それを仲の良

い友人にどう紹介するか教えて下さい」という問いを書いた葉っぱ型の紙を用意する。この紙は、図書館の廃棄本を粉砕して制作したオリジナルの和紙だ。図書館に浮遊する知を、結晶化させるイメージで製作している。
この状態で参加型インスタレーションを始める。
参加者はまず、①葉っぱ型の紙に好きな本とその紹介文を書き、②紙紐に結び付け、③更に興味が惹かれる他の葉っぱと繋げる。これが数週間~１か月程の会期中毎日繰り返される事で、葉が繁り「知の森」として有機的に成長していく。会期終了後は、全ての葉っぱを回収し、繋がった状態を保管した上で１冊の集積本に編集したり、参加者同士の繋がりをマップ化したりする。これらにより、その場所の特徴を見出したり、森の記録を共有可能にしている。またこの森は、紙や紐などの簡単な材料で出来ている為、どんな場所にも合わせた形状で作成できる。

本は、あらゆる立場や年代の人にとって身近な知の集積物だ。そして好きな本を紹介するというのは、その人の経験や思想なども含めて人柄が滲み出る行為だ。面と向かって他人と語り合う事は難しくても、間接的にアートインスタレーションとして対話するのであれば、楽しんで参加できる。そうやってハードルを下げる事で、自発的な参加を促している。

「知の森」は2009年に私がロンドン留学中に区立図書館で始めたが、当初から、市民の日常に向けたpublic designにしたいと考えていた。ロンドンでは美術館でも公共広場でも無料でアートやデザインを楽しめる機会が多く、public designに、多くの人の日常を幸せに出来る可能性を感じていたからだ。
「公共デザイン」と言うと、建築物や行政が行う事業の様な大きなフレームをイメージし易いが、私が目指しているのは「豊かなpersonal storyの集合と昇華によるpublic story」のデザインだ。個人の色濃いstoryをpublicに共有することを促し、他人やその地域と繋がる仕組みをデザインできれば、有機的なコミュニティづくりにつなげられると考えている。

知の森×哲学対話

かくして2017年末に開催した「Knowledge Forest知の森×哲学対話」コラボ企画は、1日完結の新しい試みとなった。事前に予約していた、小さい穴が沢山開いた天井の部屋で、朝から参加者の皆さんとその穴に紙紐を通し、教室中に吊り下がる雑木林のような「知の森」の土台を作った。そして「知の森」の物語を共有した上で、自分の好きな本の紹介を葉っぱに書き、吊るし、他の葉っぱと繋げていった。更に1時間後、ジャングルのように絡み合って成長した知の森の下で円

を作り、哲学対話を行なった。(この景色は、悶々と考え巡らせた知の集合体が正に皆の頭から登り育っているようで大変気に入っている。)問いは、「つながる事は良い事か？」。これは知の森のそもそもの目的を問う重要な主題だ。

哲学対話では、参加者が本当に素直に個人的な話を共有する事に驚いた。更に衝撃的だったのは、「筋書きやゴールを決めず、時間が来たらそこで終わり」という設定だ。私は普段、企業や個人でブランディングやデザインを行っている為、必ず目的やゴール設定、顧客が何を得られるか等を明確にした上でアウトプットを創造する。その為、哲学対話の設定は成り立つ実感が無く、やや無責任じゃないかとすら考えていた。
だが対話が進むに連れて実感した。時間や成果から解放されて、全て肯定される場で自分の意見を発する事は、とても気持ちの良い事であり、それは日常生活で殆ど機会が無いのだ。だからこれ程シンプルなルール設定の元で、参加者は今の自分に集中でき、素直な考察や発言ができるのだ。これは、哲学という領域で実施しているからこその深度ではないかと思う。

この対話から見えたこと。人は「誰かとつながれるから参加したい」訳ではなく、「素直な自分を発せられるから参加したい」のだ。
その視点で「知の森」を振り返ると、当初は「人と繋がれる場を作る事」への意識が強かった。だが開催を重ねるうちに、「個人が自分の考えを深めたり、発信したい状態を作る事」に注力する方がより良い状況を生めると考える様になっていた。哲学対話コラボ企画は、それを確信する機会となった。

葉っぱを前にして考えたり書いたり繋げたりする時、皆本当に良い顔をするのだ。例えばロンドンでは、図書館に滞在していたホームレスが参加し、昔好きだった絵本を介して子どもと繋がれた事にすごく感動していた。また地元の富山市で開催した時は、90才の祖母が大好きな新聞コラムの話をびっしり書いて、誰かに読んでもらう事を楽しみにしていた。後日繋がったと知ると、また森に出掛けて、相手の本の紹介文を楽しそうに読んでいた。それらを見て、個人の考えや発信する意欲に寄り添う事が、普段の社会では見えない繋がりを作れる鍵だと感じていた。

デザインの強み

「知の森」で、私はシンプルなルールと問いを立てているに過ぎない。
ただ、性別・年代を問わず多くの人の自発的参加を促す為、また継続させる為、デザイナーとして大切にしたポイントが3つある。1つ目は、「楽しそうで、簡単

に参加出来そうな事」。2つ目は「身体的に、実感できる質感や体験である事」そして3つ目は、「開催後もメモリーを共有出来るものを作る事」だ。例えば、この企画全体を物語化して絵本をつくったり、「森」をメタファーとした全身が包まれるサイズの造形物を作ったり、和紙や紙紐、スタンプなど身近で手触り感のある素材を使用したりすることで、直観的に興味を惹かれるデザインにしている。魅力的なデザインは、情報伝達に留まらず、メッセージを押しつけるわけでもなく、個人が能動的に考えてみたい、関わってみたいという気持ちを促す事が出来る。また、デザインによって思考を可視化する事も出来る。例えば哲学対話の様に集中して深めた思考の連鎖を可視化し、次のアクションに展開していく事も出来るだろう。美的に、非言語的に、身体的に、人を惹きつけられる事はデザインの強みだ。

大きな器と、新たな知の森

梶谷さんの印象も重なって、哲学対話の途中、これは「シンプルで清潔な白い大きな器」のようだとイメージしていた。自分の素直な気持ちを安心して投げ込める、素直で嘘のない空間。例え悲観的な言葉を投げ入れても、カランと軽やかな音をたてて、別の誰かが拾い、変に気を遣わず、また言葉を繋げてくれる。その「大きな器」は、自分が素直に考え、発信し、対話できる、居心地のよい空間を作り出している。この意味において、「知の森」も大きな器でありたいと思う。

哲学対話コラボ企画以降も、ポーランドのアートフェスで色鮮やかな森を作ったり、富山県のまちづくり団体とバルーンの森を作ったり、様々な場所で展開してきた。「知の森」を始めた12年前と比較し、個人の発揮が豊かなまちづくりに直接的につながる意識はぐっと近づいていると思う。更に、コロナ禍でオンライン共有化や居住地の多拠点化等が加速した為、個人↔まち↔世界は当たり前に近くなった。
ここ2年間は、私自身の出産とコロナ禍が重なりインスタレーションを開催していないが、世界が大きく変化した今、「知の森」で新たな繋がり方を試みたいと思う。以前の様に公の場で他人と直接関わる事は難しくなり、人とどう繋がる事ができるかは、世界共通の関心事となった。そんな中で、オンラインでの哲学対話の進化も伺いながら、改めて「個人が素直に考えを深めたり、発信したりすることが出来る場所」として知の森を進化させ、居心地良い繋がりを実感できる機会を作りたい。
そのキーワードは、「大きな器」なのかもしれない。